

戦争と電気通信

中

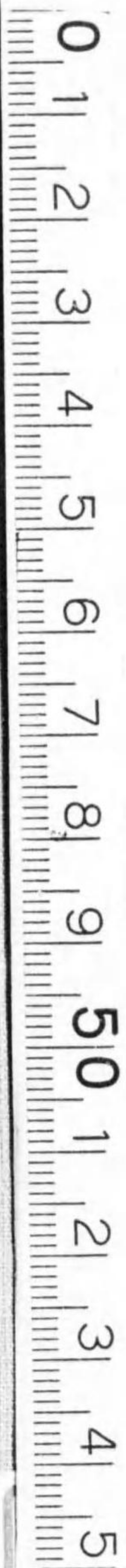
694-N45ウ



1200500751125

694  
N45

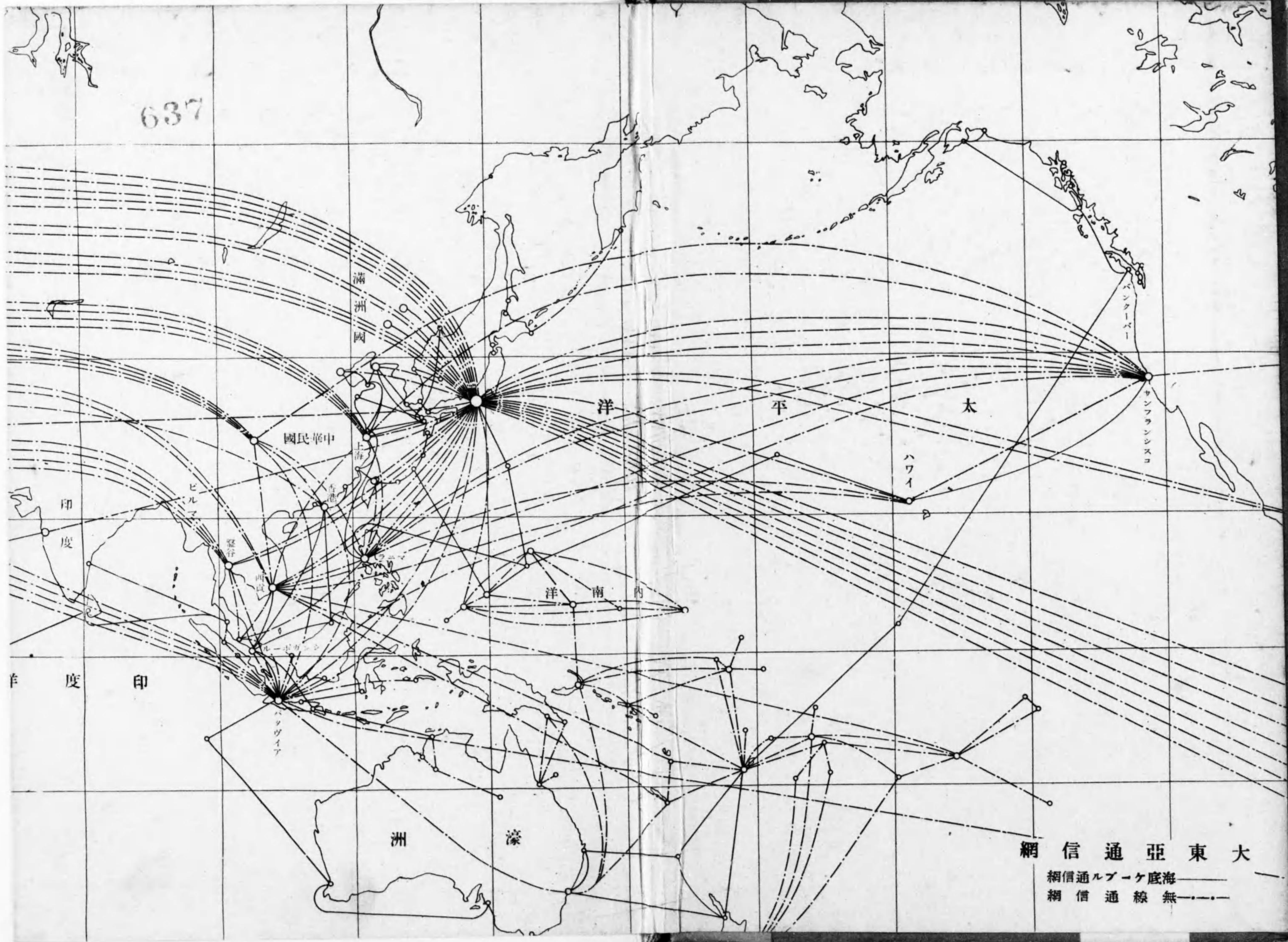
次著



始



637



大東亞通信網

—— 海底ケーブル通信用網  
 - - - 無線通信用網

694  
N45  
⑦



中山龍次著

戦争と電気通信

社団法人  
電気通信協會發行



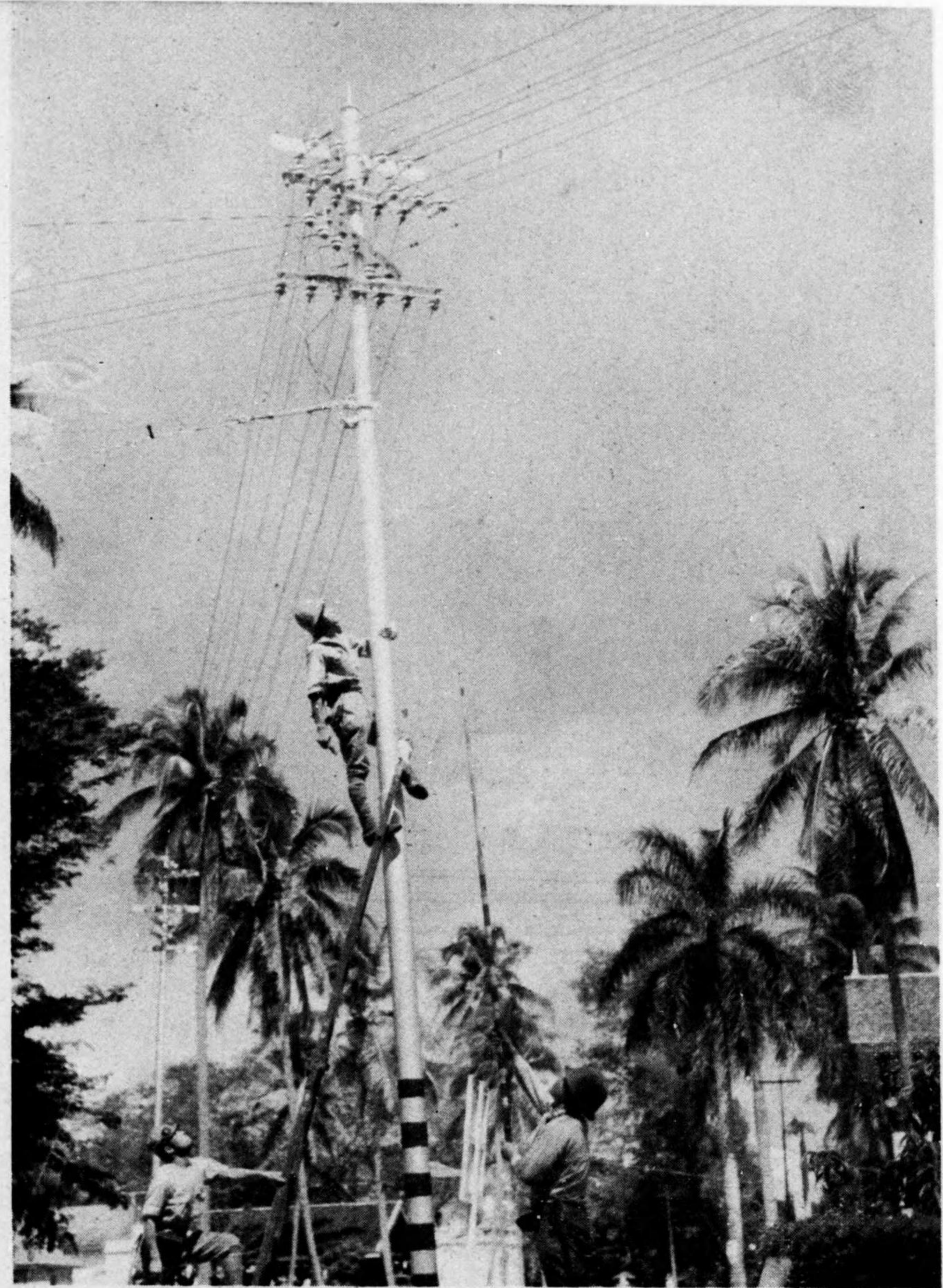


躍活の隊信電線無るけ於に上艇○線戦○○ ↑  
↓絡連のと地基るけ於に戦前最下天炎





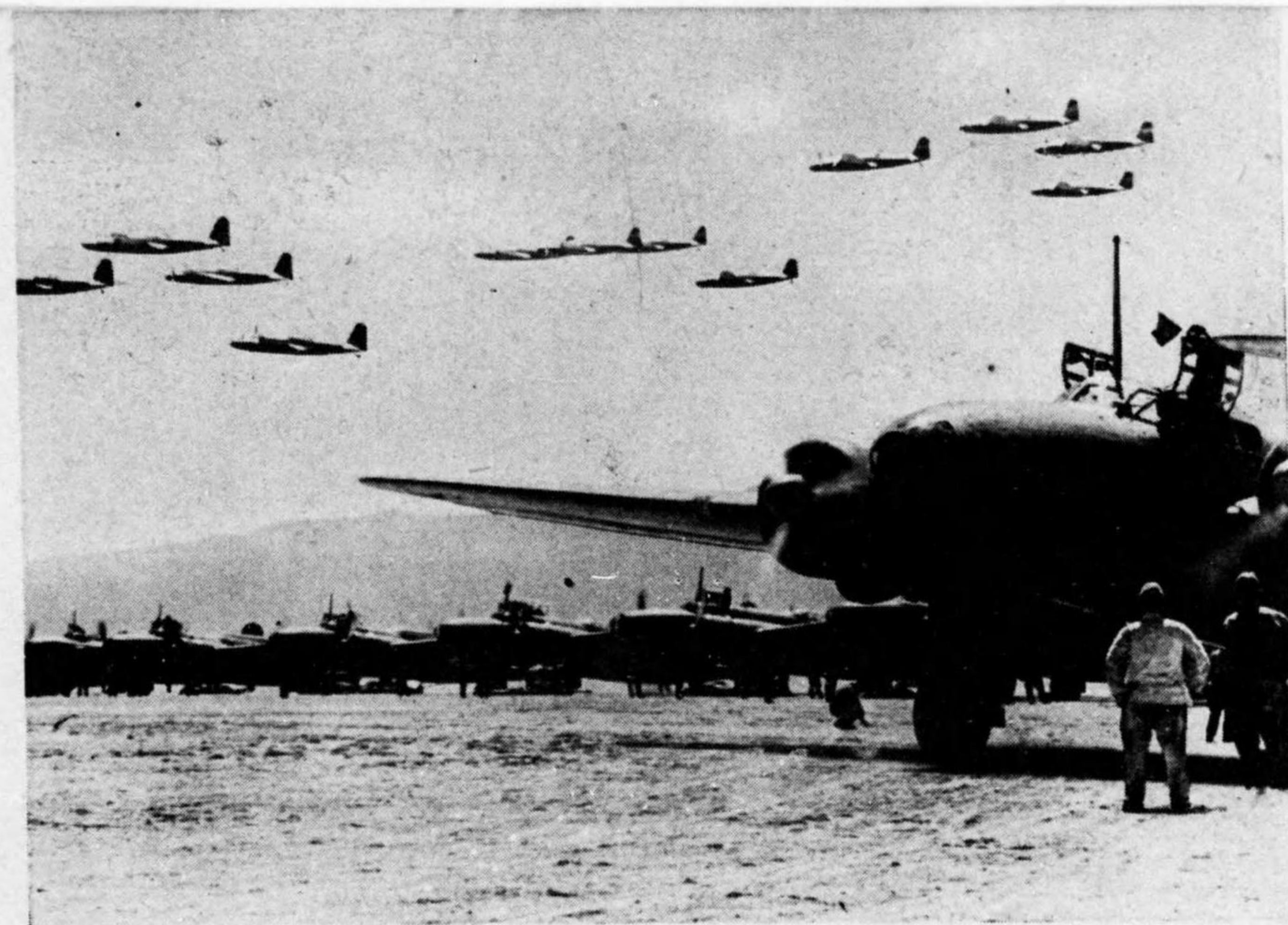
線架てけ分搔をルグンヤジ線戦マルビ



隊信電るす躍活で(ーレマ)ルサンカラアク



絡連信通てに境國〇〇の踏未跡人



(地基〇〇線前)ナテナア上機角觸の驚荒が我 ↑  
↓ 班信通戰野るけ於に中煙硝戰作原中





↑前線の觸角電氣通信(母國の便りを聴く)〔獨逸〕  
←ゴムボートに依る通信隊の電線布設〔獨逸〕

## 序

906  
158

戦争に於て電氣通信が極めて重要な役割を受持つて居ることは何人も知つて居る所であるが、其の働きは常に蔭に隠れて居るので、其の使命の重要さ、効果の偉大さの實際に就ては遺憾ながら未だ知られて居ない。

輓近電氣通信の技術、特に無線通信及びラジオ技術の發達に伴ひ大東亞戦争及び今次の歐洲大戰に於ては、電氣通信の利用に就て幾多の新機軸を出して居る程度も蓋し世人の豫想以上である。

大東亞戦争が東西一萬三千軒、南北一萬二千軒の廣大なる地域に亘る爲に、其の作戰上に於て電氣通信の重要性は特に發揮されて居る。赫々たる戦果の裏面に於ては、電氣通信の活躍が其の先驅を爲して居るのである。

作戰に於てのみならず、更に此の廣大なる地域に於ける幾多の國家と多種多様

の民族を打つて一丸としたる共榮圈を建設するの大業を考ふる時、我々は益々電氣通信事業の重要性を痛感するのである。

此の小冊子は戦争に、外交に、將又戦後の經綸に、所謂總力戦に於て電氣通信が如何に活用され、其の働きが如何に偉大なるかに就て、専ら實例を擧げて聊か世人の參考に供したいと云ふ目的で筆を執つたのである。

昭和十七年三月六日夜、特別攻撃隊に關する大本營發表並に平出海軍大佐の放送に襟を正し、更に「襲撃隊の一艇より襲撃に成功せりの無線放送が最後のものなりし」に感激しつゝ

著者しるす

## 目次

緒言.....一

現代戦に於ける電氣通信——十二月八日緒戦劈頭に於ける電氣通信——僅々數時間にして世界に知れ亘つた布哇海戦の戦況——機上に聽く布哇奇襲成功の電波——建設工作与電氣通信——宣傳戦と電氣通信——對日包圍陣の強化と通信上の孤立——銃後に於ける電氣通信——四大戦役の教訓

第一章 近代戦に於ける電氣通信.....一五

(前歐洲大戰以前に於ける實例)

第一節 佛國の安南、シヤム遠征に於ける電報の抑留、竊取.....一五

第二節 米西戦争に於ける重要電報の不達.....一七

第三節 南阿戦争に於ける中立國電報の檢閲.....一八

第四節 日露戦争に於ける例.....一九

(イ)仁川海戦と露國電報の不達.....二〇



(ロ) 得利寺會戰……………三三

(ハ) 中立國の無線通信を利用した例……………三三

(ニ) 日本海々戦に於ける無線通信の偉勳……………三五

(ホ) 日露媾和談判に於ける重要電報の漏洩……………三六

第五節 伊土戦争に於ける例……………三七

第六節 前歐洲大戰に於ける例……………三六

(イ) 獨逸の敗因は通信上の孤立に在つた……………三六

(ロ) エムデン號の最後……………三九

第二章 現代戦に於ける電氣通信……………三一

第一節 飛行機と無線……………三一

(イ) 電波に依る方向探知……………三三

(ロ) ロンドン空襲……………三四

(ハ) 飛行機と軍艦との無線連絡……………三五

(ニ) 飛行機と戦車隊との無線連絡……………三七

(ホ) 電波に依る敵機襲來の測定……………三八

第二節 氣象觀測と無線……………四〇

(イ) オランダ攻略に於ける獨軍の利用……………四〇

(ロ) 敵前上陸に際して我軍の利用……………四一

第三節 電波に依る敵軍司令部の位置測定……………四三

第三章 現代戦に於ける放送戦……………四五

第一節 放送戦は智慧の戦争……………四五

第二節 戦闘に於ける利用……………四八

(イ) 敵軍と同一波長の電波を利用した謀略放送……………四八

(1) ポーランド作戦に於ける例……………四九

(2) ノルウェー作戦に於ける例……………五〇

(ロ) 飛行機上より發信したる謀略放送……………五一

第三節 謀略上に於ける利用……………三

(イ)後方攪亂と放送——通州事件……………三

(ロ)徐州會戰に於ける我軍の巧妙なる利用……………四

(ハ)敵軍牽制の軍略放送……………五

第四節 敵軍の戦意喪失に利用した放送……………五

(イ)獨軍の對ポーランド宣傳放送……………五

(ロ)獨逸の對佛宣傳放送……………五

(ハ)ヒットラーの平和勸告放送……………六

第五節 非常事變とラジオ……………六

(イ)西班牙革命に於ける放送局占領……………六

(ロ)奧太利革命の失敗……………七

(ハ)滿洲事變とラジオ……………七

(ニ)二・二六事件とラジオ……………七

第四章 宣傳と電氣通信……………六

第一節 前大戰に於て獨逸を悩ました英國の宣傳……………六

第二節 鎬を削る海外放送……………七

獨、伊、佛、英、米、日……………七

第三節 電報放送に依る對外宣傳……………七

第四節 戦時下に於ける宣傳放送の實際……………七

(イ)離間策に利用した宣傳放送……………八

(ロ)「極東危機」を實現せしめた宣傳放送……………八

(ハ)自國民及び第三國民を欺くデマ放送……………八

第五節 世界の信用を博した我國の宣傳……………八

第五章 戦争と電氣通信政策……………八

第一節 國際海底線の中立性を過信したる時代……………八

第二節 英國の世界通信壟斷時代……………九

第三節 近代に於ける通信政策の基調…………… 一〇九

第四節 近代に於ける列強の自主的通信政策…………… 一〇九

    (イ)獨逸 (ロ)佛國 (ハ)英國 (ニ)米國

第五節 國際通信網の革新…………… 一〇一

第六章 戰爭準備に對する列強の通信網計畫…………… 一〇四

    第一節 歐洲大戰前に於ける大電力放送の競争…………… 一〇四

    第二節 周到なる獨逸の準備…………… 一〇八

        (イ)普佛戰爭後に於ける電信幹線の改築…………… 一〇八

        (ロ)伯林オリンピック大會に於ける世界放送は今次大戰の準備…………… 一〇九

    第三節 太平洋制覇を目的とする米國の通信政策…………… 一一一

    第四節 我國に於ける前例…………… 一二三

        (イ)日清戰爭に對する準備…………… 一二三

        (ロ)日露戰爭に對する準備…………… 一二六

第七章 戦後經營の先驅者——電氣通信事業…………… 一二九

    第一節 我が四大戰役の電氣通信事業發達に及ぼしたる影響…………… 一二九

    第二節 日清戦後經營と第一次電話擴張…………… 一三一

    第三節 我が大陸發展の先驅としての電氣通信事業…………… 一三三

        (イ)日露戰役中に成立した朝鮮通信事業の委託經營…………… 一三三

        (ロ)滿洲事變後に於ける滿洲電信電話株式會社の設立…………… 一三四

        (ハ)支那事變後に於ける華北、華中、蒙疆及び厦門の各通信會社の設立…………… 一三五

第八章 東亞通信網建設の礎石…………… 一三九

    第一節 東亞通信界に我國の投じた礎石…………… 一三九

    第二節 日米海底線の連絡——我國の布設したる最初の國際海底線…………… 一四〇

    第三節 長崎上海間帝國海底線の布設…………… 一四四

    第四節 支那電氣通信事業に對する本邦の協力…………… 一五六

(イ) 電信事業に對して……………一三六

(ロ) 電話事業に對して……………一四〇

(ハ) 無線事業に對して……………一四三

(ニ) 電線製造事業に對して……………一四三

第五節 電信借款の意義……………一四四

支那に於ける英、丁の獨占權排除……………一四四

第六節 大無線局問題を繞る日米の爭……………一四四

(イ) 支那無線界に於ける列強の角逐……………一四八

(ロ) 大無線建設と米國の横軍……………一五三

第九章 大東建設と電氣通信……………一五五

第一節 東亞諸國に於ける舊秩序……………一五五

(イ) 支那に於ける舊秩序……………一五六

(1) 阿片戰爭……………(2) 英佛聯合軍の攻撃……………(3) 長髮賊の亂……………

(4) 佛國との戰……………(5) 露國の侵略……………(6) 支那分割の危機……………

(7) 北清事變……………

(ロ) 佛國の安南侵略……………一六三

(ハ) 泰國に受けたる侵略……………一六五

(ニ) 英國のビルマ及びマレー侵略……………一六五

(ホ) 四世紀に亘る和蘭の擄取……………一六六

第二節 東亞電氣通信界に於ける舊秩序……………一七〇

(イ) 國內通信機關の驚く可き貧弱さ……………一七〇

(ロ) 歐米の支配下に在る太平洋海底電線網……………一七六

(ハ) 國際無線通信の發達……………一七三

第三節 東亞放送界に於ける舊秩序……………一七四

對日包圍の放送陣營——重慶放送局——英國系即ち香港、シンガポール、ペナン

及びラングーン放送局——蘭印放送局——濠洲の放送局——マニラ放送局

第四節 新秩序建設に對する吾人の覺悟 ..... 一六

(イ)「長期戰」に對する認識 ..... 一六

(ロ)戰爭は「非常時」に非ず「常時」なり ..... 一七

(ハ)無名の師を起す米國 ..... 一七

第五節 頼るは「自國の力」と「無線通信」 ..... 一八

(イ)頼りにならない國際條約 ..... 一八

(ロ)頼るは無線通信とラジオ放送 ..... 一九

第六節 東亞電氣通信の將來 ..... 一九

今後に於ける擴張費十億圓——人的要素と機材供給の準備

結 び ..... 二〇



緒言

電氣通信事業は平時にあつては、一國の政治、外交、經濟、其他凡ゆる文化機關の神經系統として、重要な役割を持つて居るのであるが、更に戰時に於ては、作戰上に於て、外交上に於て、銃後の經營に於て其の活用如何は常に戰爭の勝敗を決し、更に進んで一國の運命をも支配す可き重大なる結果を齎した例は、近世各國に於て起る戰爭に其の實例が少くないのである。

現代戰即ち國家總力戰に於ては、益々其の感を深くするのである。近く三、四十年來電氣通信技術が発達するに隨ひ、武器としての利用の範圍は驚く可き進歩を示して居る。特に無線通信の如きは其の最も著しいものである。就中放送の如きは前歐洲大戰に於ては、未だ發明されて居なかつたが、今次の大戦に於て始めて利用されたので其の利用の方法、範圍、効果には特に斬新のものがある。

### 現代戦に於ける電氣通信

斯様に現代戦に於ける電氣通信の利用は實に廣範圍に亘つて居るが、其の内、國內即ち銃後に於ける利用に就ては、暫らく之を他日に譲り、本書に於ては主として今次大戦に於ける利用、任務、效果の一斑に就て考究して見よう。

其の重要な事項は次の三項に分つ事が出来る。

#### 第一 戦闘に於ける利用

即ち戦線に於て武器としての利用

#### 第二 謀略上に於ける利用

即ち敵國民心を攪亂し或は敵軍を欺き且つ其の戦意を喪失せしむる爲のもの

#### 第三 外交上に於ける利用

即ち敵國の宣傳に對抗して第三國を自國に有利に導き更に進んでは味方に引込む爲にするも

の

特に今次の大東亞戦争に至つては、其の規模、性格並に區域の廣大なる世界史上未だ曾て見ざる處にして、東は遠く北米の太平洋沿岸より西はビルマに至る東西一萬數千軒、北は黒龍江より南は赤道を越へて濠洲の北岸に達する八千軒の廣大なる地域に於て、其の作戦は同時に數方面に亘り、未曾有の赫々たる戦果を收め得たる所以のものは大御稜威の下、忠勇果敢の我が陸海軍の力に依るは勿論乍ら、其の作戦に於て、其の戦闘に於て電氣通信の力に依る所極めて大なるは蓋し世人の想像以上であらう。獨逸のカール・フォン・クラウゼヴィッツ將軍は其の著書「戦争論」に於て勝利の最大要素として左の如く述べてゐる。

「……戦争遂行の必須武器としては

一、敵軍を衝壞、殲滅せんが爲の武力戦

二、敵國の經濟力を破壞し、我が經濟力を蓄積補強する事によつて武力戦の遂行を容易ならしめんが爲の經濟戦

三、敵國民の戦意を破壊し、世界の輿論を獲得する事によつて武力戦、經濟戦の遂行を容易ならしめんが爲の思想、宣傳戰

である事を擧げなければならぬ」云々

電氣通信は此の三要素の孰れに取つても缺くべからざるものであり、而かも常に其の先驅を爲すものである。

### 十二月八日緒戦劈頭に於ける電氣通信

試みに昭和十六年十二月八日早曉に於ける同時作戦の地點と本邦との距離を観るに

- 布哇 六、二〇〇軒
- ウエーク 三、四〇〇軒
- グワム 二、四〇〇軒
- 上海 一、八〇〇軒

- 香港 二、八〇〇軒
- ダバオ 三、四五六軒
- バンコック 四、五〇〇軒
- マニラ 三、〇〇〇軒
- シンガポール 五、三一〇軒

斯る廣大なる地域に亘る九方面に於て同時作戦を敢行するに當つて、先づ以て緊要なるは命令の傳達、情報の速達、戦果の報告である。十二月八日未明之等現地に於ける空、海、陸の軍隊に下されたる作戦命令が完全に傳達されたるや否やは、實に戦果を決する最要鍵であつた。而して當日は此の作戦命令の無線通信は完全に通達したのである。當日に於ける彼の如き史上比類なき赫々たる戦果を擧げ得たる軍行動の先導は即ち電氣通信であつた。

更に其の日に於ける戦果が如何に迅速に我が國民に報道せられたるかに就て見るに左の如くである。

午前六時 大本營陸海軍部發表

「帝國陸海軍は本月八日未明、西太平洋に於て米、英軍と戦闘状態に入れり」

午前九時 支那方面艦隊報道部發表

「上海在港英ベトレル號擊沈、米ウエーク號捕獲せり」

午前四時 駐泰帝國大使館發表

「八日早曉マレー國境を突破し、侵入を開始し、泰國を救ふ爲英國軍を泰國外に掃蕩しつゝあり」

午前十時四十分 大本營陸軍部發表

「八日未明より香港の攻撃を開始せり」

午前十一時 大本營陸海軍部發表

「八日未明ハワイ方面の米艦隊並に航空力に對し決死的大空襲を敢行せり」、「シンガポール、ダバオ、ウエーク、グアムを奇襲せり」

午前十一時五十分 大本營陸海軍部發表

「早朝馬來半島の奇襲上陸作戰を敢行し、著々戦果擴張中なり」

午後五時 大本營陸軍部發表

「香港攻撃の戦果に就き」

午後八時四十五分 (一) 大本營海軍部發表

「布哇空襲の戦果に就き詳細なる發表」

(二) 大本營陸海軍部發表

「比島空襲の戦果に就き詳細なる發表」

斯の如く蜿蜒二萬軒に亘る廣大なる海洋戦線に於て同時に起れる九方面の作戰に關し、即日中に詳細な戦果の報道に接するの一事を以て見るも如何に電氣通信が戦闘の命令、情報報道の傳達に重大なる役割を演じたるかを想像するに難くないのである。茲に電氣通信を有せざる時代に於ける通信の速度に就て回顧して見るも興味ある事と思ふ。

二百四十年前——元祿十四年三月十四日に起つた松の廊下の刃傷事件を報道する爲、同日已



の下刻（即ち午前十一時）に江戸を發足した早駕籠が赤穂に到着したのは十八日即ち五日目の亥の刻（午前十一時）であつた。通常の飛脚便であつたならば、十五日以上を要する百七十里の道程を四日と十一時間で到達したのであるから、當時に於ける通信としては、實に超スピードの速さであつた。然しこれを時間に直すと百七時間を要して居るのである。

八十三年前——徳川幕府の軍艦咸臨丸が今より八十三年前の萬延元年正月十九日浦賀を船出して無寄港で太平洋を乗り切り、出帆以來三十七日を費し二月二十五日無事サンフランシスコに到着し、歸途は三月十九日出帆、途中布哇に寄港の上五月六日無事神奈川に歸港した。此の間四十八日を費して居る。

#### 僅々數時間にして世界に知れ亘つた

#### 布哇海戰の戰況

我が布哇奇襲に關する戰況は、布哇無電局より米國海軍省へ報告せらるゝと同時に

に、世界各國に知れ亘つたと云ふ面白い事實があつた。それは米艦隊より本國政府への戰況報告は暗號電報を使用すべきであつたにも拘らず、狼狽の極、暗號を使用せずして普通文を以て報告した爲、此の無電は即時世界各國に知れ亘り、我國に於ても明瞭に聴取し得たので、其の筋では我が艦隊よりの報告の達する數時間以前に我が奇襲の戰果——米艦某々號が撃沈されたとか、火災を起して居るとか、飛行場が爆破されたとかの報告——は手に取る様に聴き取られたのである。

#### 機上に聽く布哇奇襲成功の電波

布哇空襲より數時間の後、我が荒鷺は大鳥嶋（ウエーキ嶋）を空襲した。○○基地を出發した我が荒鷺の無電機には計らずも布哇空襲に關する敵の電波が入つて來たので、勇躍出動したのである。大鳥嶋渡洋爆撃記（讀賣新聞一月二十四日）に左の一節がある。

「密雲の壁をやつと抜けた時布哇から敵の電波が機上に飛び込んで来た。慌てゝる敵の狼狽振りが見つくり其の儘電波に乗つて流れ込む。おゝ！ 友軍編隊は布哇空襲に成功したのだ！ 眞珠灣が震撼して居る、敵は慌てゝ居る、成功だ、成功だ。奇しも敵のラジオに依つて教へられた。全員勇躍、我等も誓つて武勳を樹てよう。」

### 建設工作と電氣通信

今次大戦の特色の一つは戦争と建設とが同時に行はるゝことである。現代戦争は實に國力を盡しての一大消耗戦である。國の人力と資力を擧げて戦はねばならない。又苟くも海外に於て獲得し得る資源は進んで之れを開発し、生産し、利用する事に全力を盡さねばならない。斯の如き建設工作を遂行する上に於て第一に要求されるのは何と言つても電氣通信機關である。

### 宣傳戦と電氣通信

今次大戦の特色の他の一つは宣傳戦の盛んに行はるゝことである。而して其の宣傳は主として最新の進歩せる電氣通信を應用することである。今次大戦の相手國たる米英、重慶は宣傳術に於て最も長けたるもので常に其の方法手段を擇ばない。之が爲我國が測る可からざる不利を蒙つた實例は尠くないのである。されば我國として之に對抗して敵のデマ宣傳を粉碎し、我國の立場を明かにすることは戦争完遂上極めて肝要なる手段となるのである。

従來の宣傳は主として文書、新聞、映畫等に依つたのであるが、今次の戦争に至つて主として電氣通信に依ることゝなつた。即ち無線電信電話に依るものとラジオ放送に依るものである。

## 對日包圍陣の強化と通信上の孤立

昭和十六年初頭より米英に依つて計畫せられたる所謂A、B、C、D包圍陣が次第に強化せらるゝに従ひ、我國を世界通信より孤立せしめんとする敵性通信包圍陣も亦強化せられた。蓋し前歐洲大戰に於ける獨逸の敗戦の重大なる原因は英國に依つて開戦劈頭あらゆる海底線を切斷せられ、爲に獨逸は世界通信より孤立に陥つた事にあつた。此の實例に鑑み米英は我國に對しても通信上孤立に陥らしむる計畫を樹てたのも當然であらう。即ち昨年夏頃より郵便に依る通信は先づ杜絶せられ、爾來我國の海外通信は海底線と無線に依るの外なかつた。而も一朝開戦の曉に於ては海底線に依る通信は太平洋に於ては米國に依つて、又西、南太平洋及び印度洋に於ては英國に依つて切斷せらるゝのであるから、其の場合に於て頼るは無線通信とラジオ放送に依る外はなかつた。

果して昨年十二月八日宣戦布告と同時に對米、對英、對ヒリッピンを始め反樞軸國たるの態度を採つた諸國即ち印度、蘭印、メキシコ、ブラジル、ペルー、チリ、アフガニスタン等に通ずる國際無線電信電話は續々中止するに至つた。此の時に在つて我國を世界通信の孤立より護るものは獨、伊、リスボン（ポルトガル）、ベルン（瑞西）、ブエノスアイレス（アルゼンチン）との無線通信とラジオに依る海外放送等とであつた。若し此の長距離無線通信とラジオ放送とが今日の如く發達せざるに於ては我國は前歐洲大戰に於ける獨逸と同じく通信上の孤立に陥つたであらう。

## 銃後に於ける電氣通信

更に銃後に於ける思想の指導、輿論の統一或は經濟界、產業界の整備擴充に就き考ふる時、吾人は電氣通信が凡ゆる方面に於て其の先驅者たるの活動を俟たねばならぬ事を深く感ずるのである。

## 四大戦役の教訓

明治以降我國の遭遇したる四大戦役即ち日清、日露、世界大戦及び滿洲に於ける電氣通信並に戦後經營と電氣通信との關係に就て吾人は既に貴き經驗を體驗して居る。

此の經驗こそ今次の大東亞建設に當つて見逃すべからざる生きた教訓である。

茲に余は赫々たる戦果の裏面に於て、作戰上、戦闘上、如何に電氣通信が利用せらるゝか、又外交に於て、銃後に於て、戦後經營に於て、大東亞共榮圈の建設に於て如何に重大なる役割を演ずるものなるかに就て現實の事例と既往の事實に基き研究を進め、參考に資せんとするものである。

## 第一章 近代戦に於ける電氣通信

(前歐洲大戦以前に於ける實例)

戦時に於ける通信機關は戦闘の勝敗を決する鍵となり、結局一國の運命を支配する重大なる役割を演ずるものである。而も戦争に於ける電氣通信の利用方法は、千差萬別ありて一と戦争毎に新機軸を出して居る。左に近代戦争に於て各國が夫々體驗したる主なる出來事に就て年代順に依り其の實例を擧げて見よう。

### 第一節 佛國の安南、シヤム遠征に於ける例

(第三國の海底線に依る電報の抑留、竊取)

一八八五年東京<sup>トシキン</sup>に於ける佛國遠征隊は本國との通信に關し英國海底線に從屬する事に大なる危険と不便を感じた。それは英國政府が夙に佛國政府の暗號を讀み取つて居

て在東京<sup>トシキン</sup>佛司令官クーパー提督より本國政府宛の報告電報は巴里の外務省よりも早くロンドン株式市場に漏れる爲英國人は先づ其の對策を講じて居つた。又一八九三年佛國シヤム間の衝突の際に於ては、最も重要にして至急を要するフェーマン提督宛の佛國電報でシヤム政府に對する最後通牒を含む電報は英國海底線會社に依つて電報の名宛人よりも先に、ロンドンに報ぜられ、英國政府は之に依りシヤムに於ける利害關係に善處した。従つて英國に於て必要なる對策が講究せられた後に電報は名宛人に傳達されたのである。斯の如く佛國は英國海底線の專横なる取扱に對して、重大なる危険と苦痛を忍ばざるを得なかつた。

## 第二節 米西戦争に於ける例

### (重要電報の不著は破戦の原因)

一八九七年(明治三十年)の米西戦争に就て米國の陸軍通信隊長スクワイヤー少將が其の實驗談を「陸海軍事上に於ける通信の偉力」と言ふ題の下に一九〇〇年米國海

軍協會の會報に發表して居る。其の内容は次の様である。

「一八九七年米國がスペインと鬩端を開くや、スペインは古來海軍の強勢を以て鳴り、其の艦隊は幾多實戦の閱歷を有せりと傳へられ、假令合衆國の強力なる海軍を以てするも、此の海戦に經驗多きスペイン國に對する勝敗の數未だ逆賭す可からざる状態なりしに、焉んぞ測らん、開戦の劈頭サンチャゴの一戦に脆くもスペインの艦隊は全滅の不幸を招き、西印度に於けるスペイン領土を擧げて米國の版圖に歸するの結果に終つたのである。而して斯の如きスペイン艦隊戦敗の原因は那邊に在りやと思ふに、スペインの戦敗は疑もなく二通の重要な電報の不著に原因して居るのである。即ち當時スペインのセルヴィラ提督は其の艦隊を統率して遠く西印度に在りしが、本國の海軍大臣よりセルヴィラ提督に對して二通の電報を送つた。其の一通は「至急石炭の積載をなすべし」と云ふ命令と他の一通は「他の艦隊と共に直ちに歸還すべし」と云ふ訓令であつた。然るに此の重要な二通の電報は不幸にして提督の許に達せざりし爲何等準備の整はざる内、提督の率ゆる艦隊はアメリカ艦隊の爲サンチャゴに封鎖され遂に全滅の不幸を見るに至つた。若し合衆國よりキューバに達する海底線にしてスペインの支配下に經營せられしものなれば、斯の如き重要電報の不達を見なかつたのである。」

此の二通の電報は、アメリカ政府に依つて押へられ不達に歸した爲スペイン艦隊は封鎖されたのである。此の事實は戦時に於ける電氣通信の取扱の實權を掌握することの絶對必要であることを證明する好適例である。

### 第三節 南阿戦争に於ける例

#### (第三國に發著する電報の檢閲)

前述の如く、スペイン戦敗の原因が、本國と其の植民地との間に完全なる自國の海底線通信機關を有せざるにありたる事が明かとなつたので、爾來列強は此の點に就き大なる關心を持つに至つたが、更に佛、獨等をして英國系世界通信網の羈絆を脱せんとする通信政策に拍車を掛けたのは、其の翌年に起つた南阿戦争である。此の戦役に於て、英國の海底線支配權の傍若無人さは其の極に達し、獨、佛其の他列強をして非常な苦痛を感ぜしめた。即ち南阿戦争の勃發當初に於て英國は其の作戦に非常な失敗を來し、一方に於て列國の同情が小國トランスバールの國民に傾き、形勢甚だ憂ふ

可きものがあつた。茲に於て英國は一八九九年十月アデンに於て、突然南アフリカ及び東アフリカの一體に宛てたる電報に對して嚴重なる檢閲を行ひ、同時に一切の暗號電報の取扱ひを停止した。南アフリカ及び東アフリカに植民地を有する獨、佛は、政府或は民間の一切の暗號通信を禁止せられた爲に、非常な苦痛を感ずるに至つたのみならず、商業用電報の如きは屢々不著に歸し、或は數週間も遅延する状態に置かれた。此の如き通信に對する英國の生殺與奪の權の前には、列國は全く屈從する外はなかつた。

### 第四節 日露戦争に於ける例

電氣通信が最近の發達を見たる以來最初の大戦争は何と言つても日露戦争である。殊に無線電信が軍事に利用せられた最初の戦争も矢張り日露戦争であつた。其れ故、日露戦争中には、戦争と電氣通信と言ふ問題に就て幾多の斬新なる事例と經驗に遭遇した。

## (イ) 仁川海戦と露國電報の不達

日露開戦の劈頭、明治三十七年二月九日、突如我が瓜生艦隊は仁川港に碇泊せる露國の軍艦ワリヤツク、コーリツツの二隻及び運送船スンガリーを封鎖し、日露戦争最初の凱歌を擧げた。此の海戦に於ては恰かも米西戦争に於てサンチャゴに於ける西班牙艦隊封鎖と同様な電報不達の出来事があつた。夫れは戦争終了後に至り、露國政府は日本政府が宣戦布告前に於て露國の重要電報を數日間に亘り抑留したるは、萬國電信條約に違反したるものなることを列國に發表した。露國の重要電報を抑留したと云ふのは左の通りである。

當時京城に在る露國公使館と仁川に在る露國艦隊と旅順の極東司令長官並に釜山露國領事館との四者間に往復する電報が四日間に亘つて全く不通となつた。此の電報の不通に關し、最初に不審の念を抱いたのは流石に軍人であるワリヤツクの艦長であつ

た。同艦長は電報が不通になつて、第二日目に態々京城の露國公使を訪ね、既に二日間亘つて旅順から電報が一通も來ないのは甚だ不審であるから、旅順に急行して真相を確かめ度いと相談したが、公使は之を許さなかつた。

公使が許さなかつた理由は、當時仁川港には我が軍艦一隻「千代田」を始め、英、米、獨、佛等の軍艦が碇泊して居り、殊に露國ではワリヤツク、コーリツツ、運送船スンガリー合計三隻を碇泊せしめて、韓國政府を威壓、牽制して居たのであるから、露國公使としては仁川港より一時でも其の軍艦一隻たりとも去らしめる事を好まなかつたからである。然るに四日目に至つて、再びワリヤツクの艦長は京城に行つて、公使に迫つた所、公使は初めて事柄の唯ならぬを覺り、最も船足の速きワリヤツクを直ちに旅順に急行せしめることにした。ワリヤツク艦長は直に仁川に渡り軍船で仁川港の港外に出でんとする瞬間に、我が瓜生艦隊に封鎖されたのである。當時若し韓國に於ける通信權が露國の勢力下に在つたならば、或は之と全く反對の事態を生じたかも知れないのである。

## (ロ) 得利寺會戰

得利寺の會戰は奉天會戰に先立つ日露戦争最初の大會戰であり、而かも我軍の大勝に歸した戰鬪である。當時ロシアは旅順が日本軍に包圍せられ、孤立の状態に陥つたので、本國に於ては朝野舉つて一日も早く救援方を政府に迫つた。而も旅順には貴族とか上流階級の出身者が比較的多く、ロシア政府も此が爲に旅順救援軍を決定し、スタッケンベルグ將軍をして四萬の大兵を率ひ南下せしめることとした。此の計畫の端緒をロシアの新聞紙より得た當時伯林駐在の田村沖之甫少佐(後の少將)、兒島惣次郎少佐(後の中將、陸軍次官)の二人は直ちに之を日本に打電した。此の報告を受けた日本側は、密かに得利寺に軍を集結してこれに備へ、スタッケンベルグ將軍の南下を待つて邀撃し、非常な大勝を得た。之は今日の如く航空機が發達し、盛んに空中偵察の行はれる時代に於ては別であるが、當時に於て、兩少佐の伯林よりの報告と言ふ

ものが戦捷の重大原因をなしたので之も戦争に於ける電氣通信利用の一例である。

## (ハ) 中立國の無線通信を利用した例

日露戦争當時、英國は局外中立國であつたが、我國とは同盟國であり好意を持つて居つたので英國側の無線通信は蔭に我國の作戰に利用された實例は少くない。

## 其の一 旅順港封鎖に於て

日露戦争當時、ロンドン・タイムス社の軍事通信員は無線電信機を装置した專屬の汽艇「海門號」に乗船し、終始、渤海灣に於て觀戦し、其の觀戦記を無線に依つて當時英國の租借地であり海軍の根據地であつた山東省威海衛に送り、同地から英國の海底線に依つてロンドンの本社に通信した。當時イギリスは中立國であつたが、タイムス通信員に依つて觀察せられ本社に通信せられた露國艦隊の行動は、直ちに日本側に



知れ、我が作戦上に利用せられたことは當然であつて、之が爲ロシアのアレキシーフ總督は非常に憤慨し、英國に對し

「將來交戦地帯にある無線装置を有する中立國の船舶は總て格好の戦利品として、拿捕し且つ捕へられたる通信員はこれを間諜として取扱ふ」

と聲明するに至つた。

#### 其の二 露國艦隊の行動偵察に就て

露國バルチック艦隊の東洋派遣に際し、其の航路は極めて秘密に附せられたが、我が國は其の進路を探知す可く非常に苦心したのである。當時英國巡洋艦「ユーージニア」號は一九〇五年三月三十一日香港に無線電信を送つて曰く、「本艦は西貢の東方五十海里の地點に於て、”ロヂエストウエンスキー”の率ゆる”バルチック”艦隊に遭遇した」と。斯る報道は其れ自體に於ては、一見無害なるが如きも”バルチック”艦隊の所在を出来る限り秘密に保たんとするロシアの努力に直接背馳するものであるか

ら其の行爲は交戦國に取つては極めて重大なる意義を有し、明かに中立性に適應しないものであつた。

#### (二) 日本海々戦に於ける無線通信の偉勳

日露戦争は無線發明以後に於ける最初の大戦争であつた爲、從來全く經驗せざりし利用方法が實用せられた。即ち其の一は哨艦信濃丸の無電第一報である。

日本海々戦の劈頭、哨艦信濃丸がバルチック艦隊の出現を認め、逸早く無線電信に依つて「敵艦見ゆ」の報告したる爲に、機先を制し、萬全の構へを整備して、之を邀へ撃つたので、戦局は非常に有利に展開し遂に未曾有の大快勝となつたことは人の知る所である。若し當時我が方に無電設備なく或は有りとしてもあの時の様に十分なる機能を發揮し得なかつたとしたら、如何なる結果を見たるかは豫測し難いであらう。此の一例を見ても戦時に於ける無線電信が如何に重大なる役割を擔ひつゝあるかを知

る可きである。

(木) 日露媾和談判に於ける重要電報の漏洩

以上は日露戦争中に於て、日本側が電氣通信を利用することに依つて、幾多の重大なる利益を得た事例であるが、最後に日本側の電報が意外にも露國に漏洩して居た爲に日本が非常に不利な立場に陥つた事件がある。それはポーツマス媾和談判の際、日本政府と同盟國英國政府との間には、日露媾和談判に就て媾和條件の最大限度と最小限度とが打合せられた。處が此の電報が如何なる機會にか、ロシア側にすつかり漏洩して居たのである。然し當時日本は全然此の事を知らなかつた。即ち日本から英國に達する電報は、長崎より以遠は、全く外國通信會社の手に依つて傳送されて居つた。就中、長崎より香港に至る迄は大北電信會社の手を經たのである、該會社は、國籍こそ丁抹にあるが、露國の皇室が其の株の多數を所有して居るのみならず、サイベリア

陸線を露政府より借りて居る關係上、兩者の關係は極めて密接であつた。兎に角、日本側の用意する媾和條件の全貌はすつかり露國側に筒抜けに知れて居つたから、ポーツマス媾和談判に於て露國の全權ウキツテの談判振りは實に餘裕綽々たるものゝあつたのも領ける。此の日本電報漏洩事件を、私が如何して知つたかと言へば、露國革命後露都に駐在して居た大毎の特派員布施勝治君に聞いた話で、同君が帝政ロシア時代の外務省に居た或る高官と一夕會食した際、該外交官は最早や秘密にする必要もなくなつたからと、前提して當時日本と英國政府との間に於ける往復電報がすつかり露國政府に漏洩して居た打明話があつたのである。

第五節 伊土戦争に於ける例

伊土戦争は一九一一年から一九一二年に亘つて行はれたが、最初イタリアはトルコ政府に對して、勸告を容れなければ爲にならぬ、と言ふ意味の最後通牒を發した。其

の日の夕刻、イタリーはトルコより外國を通ずる海底線を全部切斷し、トルコをして英其の他の國々より通信上孤立せしめた。而も其の海底線は中立國たる英國の私立海底電信會社に屬するものであつて、詰りイタリーは中立國の海底線と雖も戦時に於ては自由に之を切斷すると言ふ先例を開いたのである。

### 第六節 前歐洲大戰に於ける例

#### (イ) 獨逸の敗因は通信上の孤立に在つた

イギリスは前歐洲大戰の起つた一九一四年八月四日及び翌五日の兩日に亘つて獨逸から北米及び南米に通ずる海底線を全部切斷し、獨逸をして世界各國との通信に孤立せしむることに成功した。

獨逸のヘンニツヒ博士が、前大戰に於ける獨逸の敗因に就き十六箇年の永きに亘つて研究せられた結果著された「電氣通信と對外政策」と題する有名な著書に依ると、前大戰の獨逸敗戦の根本原因は要するに、獨逸が外國との通信の連絡を斷たれ、通信上に於て世界から孤立したことに在ると言ふのである。若し彼の當時今日の如く長距離無線通信又はラジオ等の通信機關が備つて居つて、假令海底線其の他に有線通信が切斷されても獨逸の戦勝の真相が外國に判り、又外國の真相が獨逸に傳つて居たならば、決して彼の如き慘敗を見るに至らなかつたのであると結論して居る。

今次の大戰に於ける獨逸は前大戰の敗因に鑑み、夙に戦時に於ける世界通信の確保を目的として萬端の準備を爲した。其の適例は伯林オリンピック大會に當り短波放送に依り疾くに世界三十六箇國との放送連絡を實行し、世界各國との通信は既に試験済となつて居つたのである。

#### (ロ) エムデン號の最後

前歐洲大戰中、獨艦エムデン號は南洋から印度洋上に出沒し、聯合國の艦隊の警戒を潜り各國商船に對して非常な暴威を逞うし、一時は各國をして恐怖焦躁の極點に驅り立てたが、遂に印度洋上の孤島ココスに於て英艦シドニー號に依つて其の劇的な最後を遂げたことは今尙記憶に新なる所である。ココス島は印度洋の東南に位し、南アフリカから濠洲及び東洋に連絡する海底線の重要地點である。獨逸としては此のココスの海底線の陸揚室を占領するか、若しくは之を破壊することが作戦上最も効果的な計畫であるから、必ず獨逸が其の舉に出るであらうことを聯合軍側は豫想し、イギリスの軍艦は絶えずココス島附近を航行して之に備へて居た。果せる哉、エムデン號はココス島の海底線陸揚室の破壊又は占領の目的を以てココス島に迫つた所、斯くあらうと待機して居た英艦シドニー號の發見する所となつて此處に砲火を交へたが、エムデン號利あらず、終に印度洋の藻屑と化し去つたのである。

## 第二章 現代戦に於ける電氣通信

大東亞戦争及び今次の歐洲大戰を從來の戦争に比較するに、其の特色は機械化部隊の活動に在ることは言ふ迄もない。飛行機と言ひ、戦車と言ひ其の他新なる武器も其の多くは前大戰に於て或る程度迄經驗され利用されたものであるが、就中著しき進歩發達を示して居るものは電氣通信、特に無線通信とラジオ放送の利用である。蓋し前歐洲大戰の當時に於て無線通信は既に相當な發達を見て居つたが、今次の戦争に於ける電波の利用は全く其の面目を一新したのである。茲に其の主なる實例を二、三舉げて見よう。

### 第一節 飛行機と無線

大東亞戦争並に今次の歐洲大戰に於ても最も目覺しき活動を爲したるものは、飛行機であることは言ふ迄もない。世界戦史上未曾有の赫々たる戦果を收めつゝある我が航空隊の活躍の裏面に於て無線通信が如何に重大なる役割を演じて居るかに就て、世人は一般に認識して居らないのである。

今次大東亞戦争に於ては廣大なる海洋上に在りて命令指揮の傳達、或は進路方向の測定或は空中編隊相互の連絡命令指揮、或は陸上部隊、海上部隊との連絡及び共同作戦に至る迄無線通信に依らねばならないのである。

### (イ) 電波に依る方向探知

我が海の荒鷺の方向探知となつた眞如無電臺

支那事變の初期に於て、蔣が上海の眞如無線電臺に依つて全世界に向つて盛んに排

日デマ宣傳の電波を飛ばしたことは周知の事實である。當時南京攻略に際して我軍は逸早く斯る有力なる敵性無電臺を爆破するであらうと我々は豫想したが、事實は之と反對で該電臺を遂に南京陥落直前迄存続せしめた。之は我軍が逆に該局の電波を利用し我が荒鷺の南京、上海遠征に當つて、其の方向探知の用に供したからである。それは外でもない、あの當時支那内地の基地を持たぬ我が海鷺は内地より遙々上海南京空襲に出かけたのであるが、其の時我が飛行機は該無電臺より發射する電波を利用することに依り容易く且つ確實に上海、南京の方向を測定し得たからである。方向探知機を装備した我が荒鷺隊は常に此の電波を頼りつゝ如何なる悪天候にも又夜間と雖も敵都上空に達し、有效果敢なる爆撃を試みて多大の戦果を收めた。即ち蔣介石は電波を利用して全世界に排日悪宣傳を行ひ、我軍は同じ電波を利用して空襲の道案内たらしめたのである。

電波に依る方向探知は其の後歐洲附近に於ても種々の方法で盛んに利用された。ソ聯の芬蘭攻撃に當つてヘルシンキ放送局が英國に救援の放送を行つて居る間に、其の

電波は常にソ聯飛行機の夜間空爆の道案内となつたのも衆知の事實である。

### (ロ) ロンドン空襲

電波を航空路の標識に利用したる實例は歐洲大戰にも尠くない。其の適例は獨逸のロンドン空襲である。即ち獨逸は一昨々年の十月中旬から盛んにロンドン空襲を行つて居る。十月の半頃になれば英國は霧の深い時であるが、此の霧の深い季節に而も夜襲を行つて居る。それ迄我々の想像して居たのは、秋になつてイギリスが濃霧に包まれる様になれば獨逸の空襲は出来なくなる。詰り下が見へないから空襲は出来なくなるものと考へて居た。處がドイツは霧が深くなつて來てから而も暗夜ロンドンの空襲を始めて居る。當時ロンドンは極端に燈火管制を行つて居るので、夜分自動車の爲月に平均二百人位死者を出して居る程、燈火管制が徹底して行はれて居つたにも拘らず、獨軍は濃霧の中で而も夜陰に乗じて空襲を行つて居る。これは如何にして行ふかと云

ふと當時傳へられて居る方法の一つはラジオ・ビーコンを利用するのである。ロンドンを空襲する場合に、或る二箇所からラジオ・ビーコンを發射し、此の二つを丁度ロンドンの上空で交叉するやうに電波を發射して置く、例へば一方から「——」又他方から「、」の符號を送つて居る。飛行機はロンドンの上空へ達した時「——」と「、」が合はさつて長い一線となつて符號に表はれるといふ様な方法に依りロンドンの上空である事が判るのであるから、幾ら燈管が嚴重で霧が深くても困らないのである。

第二の方法は赤外線を利用する事に依り霧を通じて遠方を視るのである。即ち赤外線を利用するノクト・テレビジョンを利用して地上を透視するのである。

孰れにしても、電波を利用する事に依り暗夜或は濃霧を冒して、巧みに空襲が行はれるのである。

### (ハ) 飛行機と軍艦との無線連絡

此の最も適切なる例は、獨艦ビスマーク號擊沈の場合に在る。英艦フード號を擊沈したビスマーク號の所在を發見した英飛行機は同艦を空中より追跡しながら絶へず無線に依り之を自國の艦隊に通報し、英艦隊は時を移さず出動したのであるが、英艦はビスマーク號よりの射撃を恐れ其の眼界の達せざる距離を保ちながら之を追跡した。そして英航空機は絶へず上空より無線に依りビスマーク號の位置と進路を艦隊に報道し、又著弾の状態を空より通報し、英艦隊は遂に水雷を命中する事が出来た。若しあの時英航空機に無線の力がなかつたらビスマーク號は擊沈を免れたであらう。

此の時ビスマーク號からも無線を以て其の急を本國に通報し、獨空軍は二百機をブレスト軍港より派遣してビスマーク號の援護に出かけたが、之は終にビスマーク號の位置を發見することが出来なかつた。と云ふのは獨軍の航空機は陸上空爆に熟練せるも、海上飛行には訓練が充分ではなかつた爲に、ブレスト軍港より僅かに四、五百海里の沖合に在るビスマーク號を發見し得なかつたのである。之と對照して我が海、陸航空機が一萬數千杆の廣大なる海洋に於て、或は地理を明かにせざる異邦に於て、暗

夜にも又荒天の下にも縦横自在に活躍して、赫々たる戰果を收むる驚くべき精神力と技能に對し、又平素の猛訓練に對し衷心より敬意を表するものである。

### (二) 飛行機と戰車隊との無線連絡

飛行機と戰車隊との間に無線電話を使つて成功した適例は、獨軍の對佛電擊作戰中に度々あつたのであるが、特に一昨年六月獨軍はマジノ線を突破し破竹の勢でパリに向つた時に、フランス軍の戰車約千六百臺が獨逸の戰車隊二千臺をアミアン地方で横合から襲撃した大衝突があつた。此の時、獨逸軍は地理に暗いが、フランス軍は自分の國內である故地理に明るいので、獨逸軍としては非常に不利な立場に在つたのであるが、獨逸軍は巧みに飛行機と地上の戰車隊との無線電話を利用して、空中からフランス軍の弱點を見て取り、無線電話で戰車隊に之を傳へた。其の連絡が巧く行つたので、アミアンの戰爭がフランスの大敗になつた。此の大敗したことが、パリの急に

陥落する因になつたのである。

(ホ) 電波に依る敵機襲來の測定

夜間爆撃に對しては、今日最高度の防空技術を以てしても完全防衛は不可能であるとせられて居るが、最近英國に於ては電波を利用して遠距離から敵機の襲來を測定する方法を設備するやうになつた。

従來行はれた爆音に依る敵機襲來の觀測は、最近飛行機の速度の増加に伴つて其の効果を奏する事が出来なくなつた。即ち、音波の速度は毎時凡そ一、二〇〇杆であるから、假りに一〇〇杆の距離にある敵機を音によつて発見したとして、其の爆音が聽音機に到達するには約五分間かゝる。従つて、現在の時速五〇〇杆程度の飛行機ならばその発見の瞬時に既に六〇杆の距離に迄接近して居り、その瞬間から該機を頭上に見る迄には僅々七分間の餘裕しかない。

所で電波の通達は雲にも霧にも暗黒にも妨害を受けない。然し若し電波の通路に航空機の如き圓形體の存在するときは、電波はこれによつて反射されるのである。従つて、此の反射電波を適當な受信機で受ければ、これによつて敵機の襲來を遠距離から感知することが出来るのである。此の電波警戒機を使用するに依り、敵機の襲來を充分餘裕ある事前に発見し得てそれだけ我方の航空機なり塔乗者には準備の時間を與ふることが出来るから敵機の邀撃に最高能力を發揮させることが出来るのである。

最近英國に於て盛んに此の方法を利用して獨逸の空襲に備へて居る事は、英國々會に於ける軍當局の説明によつて知られる。即ち

「この種の装置を操作するには、既にラジオ技術に經驗あるものならば、極く短期間の補習教育で充分に間に合ふ。現在英國に於ては陸、海、空の三軍に於てこの仕事に採用されて居る人員は數千名を數へて居る。然しこれでは刻下の時局の要求を充すべく尙不充分で、現在に於て必要とする人員は、ラジオ技術に經驗ある十八歳から六十歳迄の男女一〇、〇〇〇人なるも、今後に於ては、空陸兩軍に夫々男子八、〇〇〇名、女子三、〇〇〇名、海軍には男子二、〇〇



○名、女子三〇〇名程度の参加を必要とする。」云々。

以上は英國議會に於ける議員の質問に對する當局者の答辯の要領として報道されたのである。

## 第二節 氣象觀測と無線

戦争と氣象とは極めて重大なる關係がある。其の最も適切なる例は、文永及び弘安の役に二回とも蒙古軍は暴風雨の爲惨敗して居る。此の外戦争の勝敗が天候に支配された實例は澤山ある。而して此の氣象觀測を行ふに最も大切なるものは無線通信である。今次の大戦に於ても、無線に依り適確なる氣象觀測を行ひ之を戦争に利用した例は少くない。

### (イ) オランダ攻略に於ける獨軍の利用

一 昨年五月獨逸がオランダ攻略を實行する時に一番心配したのは雨天であつた。雨に降られると重い戦車等持つて行くのであるから、非常に軍の行動に影響する。其處で雨に降られない日を選ぶことが獨逸軍にとつて最も肝要であり、又非常に苦心した所であつた。當時はフランス、イギリス、スカンデナヴィヤ等周圍は皆敵國である故、オランダの天候を觀測することに非常な不便を感じた。結局何に依つてやつたかと言ふと、獨逸軍は色々苦心して無線電氣やラジオの放送を利用して各國の氣象通報を聽いて、天候の觀測をやつた。さうして約二箇月と言ふ長い間を費して調べた結果、一 昨年五月十日から二十日迄天候が大丈夫であることを豫測してからオランダ攻略に取り掛つたのである。そして和蘭の攻略戦は五月十日より十七日に終つたが、晴天は豫測の通り十日から二十一日迄續いたのである。

### (ロ) 敵前上陸に際して我軍の利用

これと同じ應用の例が支那事變に於ける皇軍のバイアス灣敵前上陸の際にもあつた。昭和十三年十月十三日に決行された廣東攻略作戰に於けるバイアス灣敵前上陸は一兵を損せずして成功し、見事な戦果を収めた。抑々同地方に於ける十月頃の天候は極めて悪いモンスーンの季節であつて、暴風雨の襲來は上陸作戰にとつて最も警戒すべき所であつた。これを避ける爲に我軍としては事前二箇月の長きに亘つて亞細亞西南方面に於ける氣象通報の蒐集に努めて、同方面の氣象の精細なる研究を遂げて暴風雨襲來の憂ひなき時日を選んでこれを決行したとのことである。之等は氣象觀測と無線電信利用の好適例である。

### 第三節 電波に依る敵軍司令部の位置測定

ポーランド攻撃に於ける例

今次歐洲大戰に於て電波を利用し敵軍主腦部の位置を探知し、之れに猛爆を加へ成功した適例はポーランドの攻略の時にあつた。ヒットラー總統はポーランド攻略に際し大體二箇月間で完了することを豫言したのであつたが、實際は十八日間で成功したのである。最初獨軍が首都ワルシャワを爆撃するや、ポーランド政府は何處かに逃げた。然も二、三日過ぎると獨逸は其の移轉先に行つて爆撃をやつて居る。ポーランド政府は堪らないから又移轉する。二、三日過ぎると其の逃げて行つた先に又爆弾が降つて來る。斯様にポーランド政府や參謀本部が行く先々に於て獨逸軍は二、三日の後に必ず空襲して爆弾を降らして居る。其の當時、新聞の報道する所では獨逸の第五列部隊が這入つて居て、内通するのだらうと言つて居つた。處が實際は電波の御蔭である。即ち獨逸軍は豫めポーランドの國境近くのプロイセン、シユレシア、スロヅアキアの三箇所に精確なる電波測定機を設備し、之に依りポーランド側の使用する電波の性質、強弱、方向等を研究して、此の電波は何處から出て來るかと言ふ方向發信所の位置等を探知する。之に依つて的確にポーランド政府や參謀本部の移轉先を確め得た

のである。だから移轉すると二、三日の後には直ぐ爆撃に出掛けたのである。斯様に獨軍は全く電波の利用に依りポーランド攻略に非常な成功を収めたのである。

### 第三章 現代戦に於ける放送戦

#### 第一節 放送戦は智慧の戦争

放送事業の創始は前歐洲大戰の後である。従つて放送を大規模の戦争に利用したのは大東亞戦争と今次歐洲大戰が始めてである。滿洲事變や西班牙の内亂の際などに於ける放送の利用に就ては種々の實例もあつたが、孰れも其の規模は小さかつた。實際に大戦争に應用したのは今度が始めてである。茲に近代戦に於ける放送の利用の状況を述べて見度いと思ふ。

言ふ迄もなく戦時下に於ける國內放送の重大使命は國民の指導、思想の善導、輿論の統一を大眼目とし、常に迅速にして正確なる報道を國民に提供するに在る。

現在の戦時下に於て國民が如何に放送を利用し、又之に頼つて居るか支那事變勃發後に於けるラジオ聴取者の急激なる増加に依つても之を知る事が出来る。即ち昭和十二年七月支那事變勃發前後の三箇年間に於ける聴取者の増加の比較は左の通りである。

事變前三箇年 (一九一〇— 一一年度)	に於ける増加數
一箇年平均	三九六、八六七
事變後三箇年 (一二・一三— 一四年度)	に於ける増加數
一箇年平均	六五二、四三八

之を要するに、事變發生後の四箇年半に於てラジオ聴取者の數は三百萬より六百四十萬に増加し、殊に大東亞戦争開始以來聴取加入者の増加は極めて顯著なるもので、從來一日平均の新規加入數は三千程度のものが、昨年十二月十七日には一萬一千九百三十三に、更に同月二十四日には一萬四千二百五十と言ふ驚異的加入を示し、十二月中の許可總數は實に十七萬四千九百三十六に及び、放送開始以來の新記録である。此

の一事を以て見るも、國內に於て如何にラジオが國民一般に利用されて居るか判る。然し國內放送に關しては詳述する事は之を他日に譲り、本論に於ては主として戦争に直接關係する範圍に限ることとする。

飛行機の戦闘に於てはその勝敗は機械の性能と、操縦者たる人の精神力と手腕の問題であるが、放送と云ふものになると、其の効果は全く利用者の智慧の問題で、之を利用する宣傳或は軍略上の目的に於て智慧比べと云ふことになるのである。即ち

戦闘に、謀略に、外交に

利用する放送に至つては孰れの國に於ても、技術と科學を利用し權謀術策を用ひ、殆ど其の手段を撰ばないのである。例へば

1. 敵國の使用する波長と同一の波長を使用するに依り、一面に於ては敵國の放送を妨害するのみならず、他方に於ては虚構の放送を行ひ、虚偽の命令を發し、敵軍、敵國民を欺き攪亂すること

2. 虚構の報道に依り、或は事實を隠蔽し自國に有利なる報道を宣傳すると同時に、第三國を自己に有利に導かんとすること
  3. 敵國の民心を引き付ける様な話題や、良い聲のアナウンサーを使用して敵國民をして耳を傾けしむること
- 等枚舉に違ないのである。

## 第二節 戦闘に於ける利用

戦闘に於ける放送の利用は、廣い意味に於ては電波の利用である。今次の如き戦線の廣大なる場合に於て其の利用の方法、威力は前大戰の時に比して著しく發展擴大して居る。軍艦、飛行機、戦車の戦闘に於ける電氣通信の利用の一斑に就ては、既に第二章に述べた通りである。茲には特に放送の利用に關する實例を擧げて見よう。

### (イ) 敵軍と同一波長の電波を利用した謀略放送

#### (1) ポーランド作戦に於ける例

獨逸軍によるポーランド電撃戦が十八日の短時日に成功を見るに至つた原因は、作戦用兵の妙と獨逸將士の勇猛果敢によることは勿論であるが、勝利の蔭に電波利用に依る巧妙な放送戦術が秘められて居つたのである。

怒濤の如き獨逸軍の殺到によつて、ポーランド軍は支離滅裂の混亂に陥り、リュズ・スミグリ元帥による軍命令を戦線の各部隊に徹底さす方法が無かつた。此の時ポーランド參謀本部は愚かにも無線放送に依り作戦命令を傳達した。

之は獨逸軍の作戦にとつて絶好の機會であつた。獨軍は直ちにワルソーから發する軍令放送と同波長の電波を使用し且つポーランド軍の暗號を用ひた偽の軍命令を放送したのである。之を眞に受けたポーランド軍隊は徒らに右往左往させられて疲労し、或は獨逸軍の包圍の中に自ら飛び込んで壊滅したと言はれて居る。

此の成功は、獨逸が如何に戦前に於ける準備工作を完成して居たかと言ふことを説

明するものである。獨軍は進撃開始以前に既にポーランド軍の暗號を探知し、又スミグリ本營が用ひることあるべき短波放送の波長や發信、受信の装置に就ても研究し盡されて居たことが判るのである。

(2) ノルウェー作戦に於ける例

ポーランド潰滅に續いて、獨軍は一昨年四月のノルウェー作戦に於ても、放送を謀略戦に用ひ成功した例がある。獨逸軍は殆ど抵抗を受けずに首都オスロに進撃したのであつたが、オスロ峽灣の入口を扼するホルテン要塞司令官はゴータ外相の名による「獨艦を砲撃するな」との放送命令を受けた。是は獨軍の發信した虚偽の命令であつたが、ノルウェー軍は該放送に用ゐた電波の方向、性質等をも確めず之を自國の放送と信じて射撃中止を行つたと言ふことが、米國シカゴ・デイリー・ニュース特派記者に依つて報道されてゐる。

(ロ) 飛行機上より發信したる謀略放送

更に一昨年五月、オランダ、ベルギーに對する進撃に當つて、獨軍に依つて電波利用の新戦術が工夫された。それは次の如きものである。

獨軍の電波利用方法に就てはポーランド電撃戦に依つて一つの教訓を得、ノルウェー作戦で生々しい經驗を経たオランダ軍、ベルギー軍では、部隊の連絡に電波を用ひる場合には精巧な方向探知機を用意して命令放送の出所を確かめ、獨逸軍に依る電波攪亂に備へて居たのであるが、獨軍の更に進歩した電波利用の爲、之も無効となつて了つた。即ちオランダ軍の前線部隊は、明確にヘーグ或はアムステルダムの方角から發信せられた電波によつて、無抵抗命令“や、對獨降伏命令“を受け、全く戰意を喪つたのだと傳へられて居る。

英佛の軍事評論家は此の怪電波を落下傘によつてヘーグ、アムステルダムに降下し

たデザート部隊或は第五列の放送であると傳へて居つたが、最近に至つてイタリア軍事専門雑誌は此の怪放送の発信地はベルリンであり、其の放送が落下傘又は第五列隊に装置された「反射再生装置」とも言ふべき小型電波発信機により中繼せられたる爲、白、蘭軍の方向探知機は欺かれたのだと説明して居る。

### 第三節 謀略上に於ける利用

#### (イ) 後方攪亂と放送——通州事件

空中を飛ぶ電波は敵地の如何なる場所にも到達して其の後方を攪亂するに最も効果的であるから、今次の歐洲大戰に於て獨軍は巧に之を利用してゐる。對ポーランド戦に於て對佛、蘭、白戦に於て其の實例は尠くない。

蔣介石軍はソ聯の直傳であるから、中々宣傳が上手であり、又ゲリラ戦術に巧妙で

ある。そして放送を常に此の方面に利用することを忘れなかつた。曾て我方は蔣の放送に依つて後方攪亂を受けた例がある。

それは通州事件である。昭和十二年の七月二十九日午前四時に通州に於て保安隊の反亂が起り、我が同胞百二十数名虐殺された事件があつた。其の事件を後で考へて見ると、蔣介石は實に巧く放送を利用して宣傳をやつて居る。それは事件の起る三日前の二十六日の晩に南京から放送があつた。其の放送では「北京、天津の間に暴動が起つた」と言ふ。二十七日の晩になると「段々暴動が大きくなつて日本軍は敗退して北京から逃出した」と放送して居る。それから二十八日の晩になると「冀東政府の殷汝耕が亡命した」と放送した。

其の當時、此の如き放送を聞いた日本人側では蔣介石が又例のデマ放送をやつて居ると言つて一笑に附し、餘り氣に掛けなかつたが、豈圖らんや、此のデマ放送と云ふものが結局通州事件を起す因になつた。といふのは通州に入つて居る蔣の第五列部隊の連中が此の放送を利用し、保安隊や支那人民を煽動したので保安隊は二十九日の午

前四時にあの暴動を起して、殷汝耕を生捕りにして五萬圓の懸賞を目當に北京へ引張つて行つた。所が北京の朝陽門に達して見ると門が閉つて居て日本軍が守つて居る。其處で初めて北京は日本軍が占領して居ることが分り殷汝耕を置いて逃げた。これは放送が巧く後方攪亂に利用された一例である。今日より考へれば斯様のデマ放送があつたとすれば、即時之を打消す反對放送をする必要があるのである。今回の歐洲大戰に於てはイギリス側で自分の方の優勢なことを放送すると、獨逸側では直ぐ其の後で打消しの放送をやつた例が度々ある。さう云ふ工合に打てば響くやうに一方でデマ宣傳をすれば他方ではどん／＼之を反駁してゐる。

(ロ) 徐州會戦に於ける我軍の巧妙なる利用

昭和十三年五月の徐州會戦に於て我軍が放送を戰略に利用して大成功を収めた好い例がある。徐州會戦の初めに當つて我軍は支那軍を追撃して徐州の方面に向つて行つ

た。さうして我が軍は最初占領した臺兒莊を軍略上一時これを捨て、退却した事があつた。蔣介石軍は此の日本軍の退却を「日本軍の敗退」と稱して宣傳に利用した。其の當時支那軍隊は大抵一箇小隊に一つ位宛ラジオの受信機を持つて居て、每晚漢口からの放送を聴く。漢口からは何う言ふ放送をするかと言ふと「日本軍が負けて臺兒莊を捨てどん／＼北に逃げて行く」徳州の占領も間近い」とか「北京、天津に暴動が起つた」とか盛んにデマ放送を行ふ。支那の兵隊は自分の方が勝つたと言ふことになる。と馬鹿に元氣の出る兵隊であるから、此の放送を聴いて士氣軒昂當る可からざるものがあつた。

其處で我軍は放送を利用して其の裏をかいたのである。それは敵の陣地に這入つて密かに我が放送機を据付けたのである。

之は數十ワット位の小さな放送機を〇〇に据付けた。放送機類は戦車隊に護衛されて、支那軍の第一線を突破して敵地に据付けたのである。五、六日の後其の据付けが終ると捕虜の支那兵や將校を引張つて來て放送させる。其の放送は何處どこの戦に支



那軍が負けたと言ふ様な放送をさせる。其の放送原稿は我軍の手で拵へ捕虜の支那兵や將校には原稿通り一字一句も違へずにやらせたのであらう。此の放送を聽いて居る支那の軍隊は其の放送が漢口から來て居る放送か、日本軍がこつそり据付けた放送機からの放送か判らない。つい二、三日前迄は支那軍が非常に優勢であつたが、日本軍が又盛り返したと言ふので士氣沮喪したので支那軍は非常に不利に陥つた。之等は巧く戰略に利用した適例で、支那軍が初めの様に意氣軒昂であつたならば、日本軍は随分苦しんで居た事であらうと思ふ。

#### (ハ) 敵軍牽制の軍略放送

次に放送を巧く利用して敵の大軍を牽制した例がある。夫は漢口攻略の時である。我軍が最も懸念したのは、河南省の黄河南岸地方に居る程潜の率ひる二十萬の軍隊が漢口に集中されることであつた。其處で何とか程潜の軍を河南方面に引付けて置かな

ければならないので、苦心した結果○○地點に放送機を据付け盛んに日本軍の増援と優勢なことを放送した。之が爲、程潜の二十萬の軍隊は河南に牽制され釘付けになつてしまつた爲に、兵力を漢口に集中することが出来なかつたことは我軍にとつて非常に有利になつたのである。

敵軍を牽制した斯様な例は、前歐洲大戦争の時にもよくあつた。前大戦中、ソナム會戦の時イギリスは戦車が三臺しかなかつた。當時戦車が始めて戦場に現はれ極めて有力であつた爲、獨逸軍は非常に怖がつた。併し其の時には英國に僅か三臺しかなかつたので、此の三臺の戦車を晝間持つて來て、夜は汽車で之を送り歸して翌日晝間に再び之を戦場に運んだ。斯様の事を數日繰り返へしたので獨逸軍は之れに欺かれ、爲に大軍を牽制されが例がある。

#### 第四節 敵軍の戦意喪失に利用した放送

戦はずして勝つが戦の上の上なるものである以上、敵軍の戦意を喪失せしむることは最も有効である。

今次歐洲大戰に於て獨逸が放送を利用して敵軍の戦意を喪失せしむる爲に行つた幾多の謀略放送の中でも、左に示す例の如きは實に百萬の人命と百億の經費に値する程の有効且つ巧妙なものであつた。

(イ) 獨軍の對ポーランド宣傳放送

一九三九年九月三日ポーランドに對し進撃するや、獨軍は早くも

「ポーランド人に告ぐ、諸君の政府は諸君を裏切つて、既に首都を放棄せり」と言ふ放送を行つて居る。

又、九月八日の午後五時、早くも全世界に首都ワルシャワの陥落のニュースが電波に依つて送られた。此の放送は明らかに獨逸的アクセントをもつたポーランド語であ

つたが、最初に此の放送を傍受したアメリカの或る新聞社は獨逸軍のラジオ宣傳隊がワルシャワ放送局と同一波長で行つた謀略放送とは知らず、ワルシャワ陥落を大袈裟に宣傳してしまつた。

(ロ) 獨逸の對佛宣傳放送

前歐洲大戰に於ては第一線に於けるイギリスの宣傳方法は洵に巧妙であつた。無論無線電信とかラジオ放送はないから、主に印刷物に依る宣傳であるが、其の爲獨逸國民や第一線に於ける獨逸軍隊は戦意を沮喪することになつた。所が今回の戦争に於て獨逸は放送に力を用ひて敵國民の戦意沮喪の宣傳に偉大なる効果を收めて居る。就中その白眉とも言ふべきものはフランスに對する次の様な放送であつた。即ち

「ドイツの敵はイギリスである、フランスは敵でないのだ。フランスの兵隊諸君はイギリスに引きずられて戦争をして居るのは實に氣の毒だ。ドイツは君の方で攻撃に來さへしなければ、

ドイツから攻撃に行くことはないのだ。」

斯様なことを半年以上繰返し、放送して居る。又第一線に於て獨逸軍とフランス軍とが極く近い所で對陣する場合には、獨逸の方で擴声器を持ち出してトーチカの上から音楽や和やかな餘興等を送る。何時の間にかフランスの方では音楽をパリから送らして、それを擴声器に出す。斯くの如くして、一昨々年の九月三日に宣戦布告してからマジノを突破した一昨年の六月迄、十箇月以上硬著状態に在つた。其の間フランスの國民や兵隊はすつかり斯かる放送に嘯され、戦意を喪失してしまつた。さうして居る中に、突然獨逸軍は和蘭、白耳義を進撃し更にマジノ線を突破して進入して來た。フランス軍は戦争の氣のない所にやつて來られたから一と堪りもなく敗北した。

(ハ) ヒットラーの平和勸告放送

一昨々年九月イギリスに對し宣戦する前にヒットラーの行つた放送の中に最大の結

欠



# 欠

一九三一年四月スペイン革命に際して革命軍がバルセロナの放送局を占領することに依つて機先を制し、盛んに革命軍の勝利を放送した。これに依つて地方の人民は革命軍の勝利を確信した。又「首府マドリッドに於て皇帝が退位した」と云ふデマ放送を信じて國民は革命軍の國旗を掲ぐるに至つた。斯様に放送局の占領が成功の重大原因となり、遂に一九三六年に革命成功に導いたものである。

## (ロ) 澳太利革命の失敗

一九三四年七月ナチス黨がオーストリアに革命を起さんとして大統領を監禁し、ウインの放送局を占領した。放送局の占領と同時に放送に依つて「大統領の辭職」、「新政府の樹立」を一般國民に宣傳した迄は極めて有效なる手段であつたが、三時間後政府軍は全力を盡して放送局を奪還し直ちに「先程の現政府辭職云々の放送は虚偽の放送であります。ウイン市の秩序は只今全く回復しました。」と放送したので、革命の危

機を切り抜ける事が出来た。此の事實はスペイン革命の場合と相対照して放送局の占領が革命の成否の分岐點となるラジオの重要性を語る好適例である。

#### (ハ) 滿洲事變とラジオ

我國に於てラジオが非常時に其の威力を現はしたのは、滿洲事變の際を以て嚆矢とする。滿洲事變は昭和六年の九月十八日の柳條溝に於ける日支兩軍の衝突に始まるがこれより一箇月を経ざる十月には早くも問題の焦點はジュネーヴの國際聯盟の舞臺に移り、茲に日本對支那及び國際聯盟の争ひとなつた。茲に於て我國にラジオが現はれて以來、初めて國際的の非常な難問題に遭遇し、當時ジュネーヴよりのニュースに全國民が非常に關心を有つやうになつたことは當然である。然し、更に茲に注意すべき事柄はラジオに依る國論統一である。滿洲事變勃發當時は、事件の真相が内地の一般國民にさへ把握されず、それが爲に稍々もすれば事變に對する國論が一致しなかつた。

而して、事變發生の二週間後には早くも支那は國際聯盟に日支の問題を提訴する一方全世界に對して支那一流の巧妙極まるデマ宣傳を試み、列國の同情を集め、之等外國の力を利用して日本を壓迫しようとして企てた。然るに當初日本内地に於ては、一部の新聞雜誌を初め識者の間に於てすら實情を認識して居なかつた爲、事變に對する輿論が一致しなかつた。そして稍々もすれば、日本から事を構へたと信じて居る向きが相當多かつたやうである。現に當時余は或る有力なる俱樂部の午餐會に列席した際、或る知名な代議士が滿洲を視察して歸つての視察談の中に、「滿洲事變の起りは日本陸軍のやり過ぎだから、此の儘行けば日本は國際聯盟に於て袋叩きに遭ふのであらう」といふやうな説を述べた。此の話を聞いた余は斯う考へた。それは既に事變が支那側の發砲に依つて起り國際的問題となつた以上、日本としてはどうしても國論を統一して國難を打開して行かなければならぬ。當時放送事業の責任者であつた余は、これには先づ放送を利用して、出来るだけ事件の真相を國民に傳へて、輿論の向ふ所を明らかにしなければならぬと痛感し、此の方面の運動に乗り出した譯である。實はそれ迄

放送に於ては政治問題を扱ふことは許されて居らず、殊に現役軍人の放送といふものも許されて居らなかつた。然るに滿洲事變に關する放送は、一面に於て政治問題でもあり、又現地の状況を最も能く知るものは軍人であるから、是非共現役軍人の放送を必要として、當時現地に派遣された陸軍の樞要なる位置に居る人々を煩はして放送を行つた。結局九月十八日の事件發生から十一月十六日の國際聯盟理事會に於て、支那側の巧妙なる暗躍宣傳が效を奏して十三對一といふ聯盟の態度が表明される迄、二箇月間に於て數十回に亘つて滿洲事變關係の放送を行つた結果、次第に日本の國論は統一し得たので聯盟理事會に於ける十三對一、又本會議に於ける四十二對一と云ふ最悪の場面に直面しても、國內の輿論は完全に一致して微動だもしなかつたといふ事から觀ても、ラジオが非常時に於ける國內の輿論統一に如何に大きな偉力を有つかを知る事が出来る。

### (三) 二・二六事件とラジオ

二・二六事件當時、新聞のニュース掲載は禁じられ、唯僅かに戒嚴司令部内に設けられたマイクロホンを通じラジオに依り情報が出されて居つた。あの暗愴たる四日間に亘り戒嚴令下に置かれた東京市民を初め全國民はラジオを唯一の頼りとして冷靜に事件の推移を見守ることが出来たのである。若し彼の時、愛宕山放送局が反軍の爲、占據されて居たら其の結果はどうであつたか、寒心に堪へないものがあつた。

## 第四章 宣傳と電氣通信

## 第一節 前大戰に於て獨逸を惱ました英國の宣傳

大東亞戰爭及び歐洲大戰に於ける最も大なる特色の第一は宣傳の盛んに行はれることであり、第二は宣傳の最大武器として無線通信及び放送の利用されたことである。蓋し現代戰即ち總力戰に於ける最後の勝利は武力、外交、政治、經濟及び思想上に於ける緊密なる綜合戰果に依つて決せらるゝものである。此の目的を達する爲宣傳は武力戰に次ぐ所の極めて重要な役割を持つものであり、そして其の宣傳方法には最も進歩せる無線電氣及びラジオ放送が登場したのである。

孫子は二千年前に於て既に斯く言つてゐる。

「百戰百勝非善之善者也、不戰而屈人之兵、乃善之善也。」と

戰はずして勝を制する爲の最大武器は即ち宣傳である。前歐洲大戰に於て獨逸は武力に於ては東部戰線に在て、又西部戰線にて常に勝利を占め乍ら終に國內より崩壊して降伏の止むなきに至つたのは、世界通信に孤立し宣傳力を失つた事に原因する事は既述の通りである。當時獨逸は宣傳上何等施すべき手段を缺きたるに拘らず、イギリスは其の充實した通信網を動員して盛んに「ドイツの軍國主義と非人道的なること」「ドイツが勝利を得るならば、世界は暗黒になるであらう」「ドイツは物資缺乏の餘り同胞の屍體から油を採つて居る」と云ふ様なデマ宣傳さへ敢てした。斯る宣傳は之を外國に對してのみでなく、獨逸自體に開戰前から蠢動して居た社會民主主義者が猶不幸を有して居るのを見てとつて、獨逸國內に迄之を行つた。「カイゼルの專制を倒して民主主義ドイツを建設せよ」、「我等はこの新ドイツと無條件にて媾和締結の用意がある」とか「早く革命を起して共和國ドイツを建設し、永久平和のヨーロッパに參加せよ」とか、種々の手を用ひて宣傳した。ドイツの參謀本部はこれにも對策を講じた

が遂に効果はなかつた。そして革命の烽火は遂に海軍部内から上つたのである。

又戦線に於ては主として印刷物に依る宣傳が行はれ、英、米、佛軍は常に獨軍の塹壕に多數の宣傳ビラを撒いた。例へば獨軍自身の手によつて作成せられた様に偽造したビラの中に「今日も味方は退却だ、來年は全滅だらう」等書いたもの、又米軍が獨軍に撒いたものの中には「現在フランスに在る米軍の数は百九十萬で、此の千倍以上の軍隊がアメリカに待機して居る」と言ひ、或は獨軍の死傷者數や船艦の損失を驚くべく過大に吹聴して居る。最も罪深いのは「お前の國の銃後は歡樂に耽つて居る。お前達の女房は毎晩著飾つて遅く迄ダンス場で若い男達と踊り狂つて居る」等言ふを見せられたら、眞逆と思ひながらも爲に志氣は大いに沮喪したであらう。

今次の歐洲大戰に於て各國は此の實例に鑑み、豫め戰爭に備ふる爲、先づ戦時に於ける通信の安全確保に最大の努力を拂ひ、無線電信に、將又海外放送網の確立に萬全を盡した。(第六章第一節參照)

## 第二節 鎬を削る海外放送

今次の歐洲大戰に於て、樞軸國並に反樞軸國側共に鎬を削つて居る宣傳戦は、第三國即ち中立國に對する宣傳である。即ち第三國を敵側に近付けしめず、飽く迄其中立を保持せしめ、更に出來得れば之を味方に引入れ様と努力しつゝあるので、此の目的を達する爲、最も有力なる機關として活動するものは

- 一、ラジオに依る海外放送
  - 二、無線電信に依る電報放送
- の二つである。

各國に於ける海外放送の開始は漸く八、九年前の事である。即ち英國に於ては一九三三年十二月(昭和七年)、ドイツに於ては一九三三年四月(昭和八年)、又我國に於ては余が日本放送協會業務局長在任中の事で昭和十年六月一日——漸く五箇年半以前



——の事であるが、一昨々年歐洲大戰勃發後に於ける各國の海外宣傳放送は驚くべき擴充を示して居る。元來海外放送の平時に於ける目的は大體三つであつた。即ち

- 一、世界各國に向つて自國の文化を宣揚する事
  - 二、他國の宣傳に對抗し自國の實情を傳へ自國を有利に導く事
  - 三、海外に在留する自國民に母國の事情を傳へ且つ慰安を與ふる事
- であつたが、戦時に於ては敵國の惡宣傳に對抗し且つ第三國を自國に有利に導く爲特に其の重要性と緊迫性を増して來た。

(1) 獨逸は第一次歐洲大戰に於て、世界各國より通信上孤立した爲、彼の戦敗を嘗めた苦い經驗に依りヒットラーは最初より外國語放送に力を用ひて特に外國語に堪能なる者を撰んで海外放送に當らしめた。其の最も著しき實例は英語放送に於けるホー・ホー卿の放送と佛語放送に於けるモツシニュー・フェルドンネと稱する人の流暢にして非常に魅力ある放送である。されば戦前に於て既に五箇國の外國語を用ひ一日四十時間の海外放送を行つて居つたが、今日では十七箇國語を用ひ、一日五十三時間五分の長時間に亘つて放送を行つて居る。獨逸が主力を注いで居るのは對英放送(即ち歐洲向送信)、南米向、極東向(特に印度向放送)であつ

て米國に對しても英國の北米向送信と猛烈な宣傳戦を行ひ來つた。

(2) 伊太利は戦前一日僅かに二時間しか行つて居らなかつたが、今日では二十一箇國語で二十二時間行つて居る。

(3) 佛國では初め絶対に獨逸語を使用しなかつたのであるが、立ち遅れ乍ら十二箇國語を使用し一日十九時間の海外放送を行つて居る。此の時間は大戰前も今も同様で少しも増加して居らない。

(4) 英國は當初外國語を放送に使用する事を敢てしなかつたが、一九三五年の議會に於ける放送委員會で「英語以外の國語を放送に使用すべし」と云ふ建議案を可決したが、恰かも其の翌年パレスタイン問題の紛糾すると同時に伊太利との對抗上、アラビア語の放送を開始し爾來漸次外國語の數を増加し、特に今次の大戰勃發後に於ては、二十箇國語を使用し一日四十二時間の海外放送を行つて居る。

獨逸語ニュースは日に六回か七回であつたのを毎日十二回に増加し、佛語ニュースも日に十回に増加した。獨軍による被占領地域に對して佛語や蘭語、ポーランド語、ブルガリヤ語、フィンランド語等々が日に數回放送されて居る。獨語によるニュースは歐洲向以外はアフリ

カ向に使用される丈けであるが、一方、蘭印向として日に二回蘭語ニュースが實施されることとなつたことも注目に値する。

(5)米國に於ては、一昨年より猛烈に海外放送を擴充し更に大戰に入るや、歐洲向に毎日六十時間、東亞向に八時間の海外放送を行ふ外、特に南米に對する工作に努力し、南米諸國に對し日に實に八十九時間四十五分に亘り、スペイン語やポルトガル語、佛語、英語で放送を實施して來た。番組も米國の國內放送の録音を使つた絢爛たるもの、ホワイト・ハウスにマイクロフォンを置いて政府の聲明を南米向に放送して居る。又コロンビア放送會社では南米の十八箇國の放送局に定期的に中繼させる契約を結び昨年九月から之を實施することとなつた。此の十八箇國の放送局の總數六十四局、其中長波に依るもの二十九局、短波に依るもの三十五局であるから其の宣傳力は相當強大である。又NBC放送會社も既に本年一月より中南米二十五箇國の放送局に對してNBCプログラムの再放送權を無料で許可したと報じて居る。又此のNBC海外放送は極東の聽取者に呼び掛けマニラ其他に於て中繼し國民を煽動しつつある。

(6)我國の海外放送——我國に於ける海外放送は外國に比し稍々遅ればせ乍ら昭和十年六月より開始し、其の始めに當つては英語のみであつたが、間もなく佛、獨を加へて三箇國語を用ひ、世界の四方面に向つて放送して居つたが、支那事變勃發後頓に其の擴充の必要を認め、爾來數次に亘る擴充を斷行し格段の發展を遂げたのである。最近に於ては左の十六箇國語即ち日、獨、伊、英、佛、スペイン、ポルトガル、支那(北京、福建、廣東)、オランダ、マレー、タイ、ヒンズー、ビルマ、アラビアを用ひ、一晝夜實に五十三時間十五分間に亘り、左の七送信を行つて活動して居る。

第一送信——ヨーロッパ向

第二送信——北米東部向、中南米向

第三送信——北米西部向、ハワイ向

第四送信——在外皇軍將兵向

第五送信——支那、南洋向

第六送信——南洋向

第七送信——西洋アジア向、近東向

試みに今次の歐洲大戰前と勃發後に於ける獨、伊、英、佛の海外放送充實の狀況を

比較するに左表の通りである。

	大 戰 前		現 今	
	外國語の數 箇國語	一日の放送時間 時間分	外國語の數 箇國語	一日の放送時間 時間分
日 本	一〇	八	一六	五三・一五
獨 逸	五	四〇	一四	五三・五
伊 太 利			二一	二二
米			未詳	一五七・四五
英	六	二一	二〇	四二
佛		一九・三〇	一二	一九・三〇
重 慶			一四	五七

備考 日本の大戦前の數字は十四年七月調に據る。

### 第三節 電報放送に依る對外宣傳

ラジオの放送は言葉に依る宣傳で、此の無線電報の放送は文字に依る宣傳方法である。言語に依るラジオ放送が一般民衆を対象とするに對し、文字に依る電報放送は主として各國の新聞社、通信社或は官廳等を相手とするものである丈けに一般民衆の注意を惹く事は少ないが、其の効果は重大である。

ラジオ放送の技術未だ進歩せざる以前に於ては、世界の列強は長距離無線電信に依つて電報を放送して居つたのである。其の後ラジオ放送に依る宣傳が發達し盛んに用ひらるゝ今日に於ても、尙此の文字に依る海外宣傳は益々盛んに利用せられて居るのである。

我國に於ける無線電報に依る對外放送は夙に同盟通信社に依つて行はれて來たのであるが、支那事變以來數次の大擴張を行つて、最近に至つては一日一萬七千語程度を放送して居つたが、大東亞戰に即應し、今般更に徹底的大擴充を計畫し、次の如く一躍二萬數千語の放送を行ふことゝなつた。

用 語	方 向	一日の放送回数	最少語數
英語	歐洲向	五回	二、五〇〇語
	大東亞向	五回	二、五〇〇
佛 語	歐洲向	三回	一、〇〇〇語
	大東亞向	四回	一、〇〇〇
西班牙語	南 米 向	四回	一、〇〇〇
	大東亞向	四回	一、〇〇〇
華 文	大東亞向	九回	六、五〇〇
	大東亞向	三一回	五、七〇〇
羅馬字綴日本語	大東亞向	四回	一、〇〇〇
	他 歐 米 向	七六回	二六、八〇〇
計			
英 語	每日三回	九〇〇語	
和 文	每日四回	五、五〇〇字	

特に又七つの海を航行中の日本船舶に對して

の電報放送を行つて居る。

以上の放送に要する時間は午前五時半より深夜の三時に至る迄、四臺の送信機を以て各々一日四十二回に亘り、其の放送延時間は、一日八十四時間の長きに亘つて居る。

### 第四節 戦時下に於ける宣傳放送の實際

戦時下に於ける各國の宣傳放送並に所謂「デマ放送」は實に恐る可き又警戒す可き性質のものである。

戦時に於ける宣傳放送は大體左の三項に區別する事が出来る。

- 一、戦場に對するもの
- 二、敵國に對するもの
- 三、第三國に對するもの

#### 第四節 戦時下に於ける宣傳放送の實際

以上の中、戰場に於ける利用に就ては、第二章に於て、又敵國に對する宣傳の例に就ては第三章に於て既に述べた所であるが、茲に第三國に對する宣傳に就て二、三の實例を補足して見よう。

(イ) 離間策に利用した宣傳放送

同盟國或は友邦國の間柄を離間する事は作戰上極めて効果的であるから、此の方面に於ける宣傳放送も仲々多い。

英、佛が獨逸の如何なる宣傳に依つて離間せしめられ、又フランス國民の如何なる感情が之を受け入れしめたか、と言ふ點に關して、「フランス敗れたり」の著者アンドレ・モーロアは左の如く述べて居る。

「一九三一年九月の開戦當初から、ドイツの宣傳目標は主として、英佛離間と言ふ點に向けられた。戦線膠著の八箇月間、ドイツの宣傳戦は驚く可き巧妙さと執拗さをもつて此の目的を追

求したのである」

「フランスを戦争に捲き込んだのはイギリスだ」

「英國自身は戦つて居ない。それ所か、一度だつて鐵砲を撃つては居ない」

「英國は飛行機を供給し、フランスは大砲の餌食になる」

斯うしたドイツの離間宣傳をフランス人は毎日聽かされたのである。

(ロ) 「極東危機」を實現せしめた宣傳放送

昨年春頃より米、英兩國に於ては盛んに「極東危機」説を放送宣傳した。而して終に之を實現に導いたのである。蓋し彼等は此の如き脅喝放送に依つて日本を屈服せしめ第三國を自己の味方に引入れんとしたのである。試みに之に關する放送の例を擧ぐれば、

(1) 昨年七月二十八日ボストン・ラジオ放送

「日本の南進は英帝國抵抗力の強力なる障壁に衝突するであらう。英帝國が其の武力を用ひるであらう事は殆ど確實であると思はれて居る。」

(2) 同十一月十二日スケネクタデー・ラジオ放送

「日本の最後の時は來た。英國艦隊は太平洋及び印度洋に大艦隊を派遣するに充分なる力を持つて居る。殆ど長期を要せない戦闘を敢て行はうとする事は日本に採つて絶望的な戦である。」

(3) 同十一月廿一日ロンドンのラジオ放送

東亞空軍司令部は「英空軍は單にマレーの防禦に止らす必要とあらば、攻勢作戦に出で得る能力を有して居るのに満足する」旨を聲明した。

斯の如き脅喝的なデマ宣傳の放送は遂に「極東危機」の實現をデッチ上げたのである。

(ハ) 自國民及び第三國民を欺くデマ放送

次に、十二月八日開戦後に於ける米英兩國のデマ放送に關する二、三を擧げんに

(1) 布哇海戦に關するデマ放送

昨年十二月八日未明、我が海軍に依り決行された布哇海戦の戦果は米國太平洋艦隊の主力と航空兵力を撃滅したのであつたが、アメリカ當局はシラジラしくも老齡艦一隻を含む三隻を撃沈されたるのみにて、他の艦は何れも健在にして、海上に見えないのは目下日本海軍を追撃中であると發表し、全米に向ひラジオを以て放送宣傳したのである。

尙、布哇海戦直後ノックス米海軍長官の視察して歸米後公表した報告と、其の後に調査委員の調査結果を公表せる報告とはまるでとてつもない相異である。此等は當時

敗戦を糊塗しやうと躍起になつて居た敵側のデマ宣傳の一つである。

(2) 所謂「マカツサル海戦」と稱するデマ放送

更に最近に至つて、ジャバ沖海戦に關する米、蘭兩國のデマ放送がある。所謂「マカツサル的大海戦」と稱する宣傳が之である。

本年一月二十五日拂曉、蘭領ボルネオ東海岸に於ける我が陸軍部隊の敵前上陸は極めて巧妙果敢の奇襲作戰の下に大成功を収めたのであり、該作戰中我が輸送船四隻撃沈された旨大本營より發表された。然るに米、蘭當局は此のバリツクパン作戰を「マカツサル大海戦」と稱し、日本海軍並に輸送船團に大損害を與へたと左の如きデマ放送を行つて、反樞軸國家の國民や中立國に對し布哇海戦、マレー戰局の敗戦を糊塗隠蔽する事に努めた。

米國側の放送 一月二十九日午後八時ノックス米海軍長官はラジオを通じて

「マカツサル海峡に於ける大海戦は既に第六日目に入った。米海軍省最近の算定に依れば海上

敗戦の日本は二十八隻の戦艦を失つた。そして戦闘は未だ終熄して居ない。」と放送して居る。

和蘭當局の宣傳 二十八日午後八時オランダ海軍當局はラジオを通じて左の如き宣傳放送を行つた。

「和蘭海軍は今夜(二十八日)多分戦闘艦と思はれる日本大型軍艦を爆弾と水雷に依つてマカツサル海底に沈めた。日本海軍は建國以來未曾有の大敗北を被り、撃沈された艦數は十一隻に上り大損害を被つたもの十七隻で、其の數隻は使用不能、六隻は確實に沈没したと思はれる。以上合計すれば沈没、破損又は沈没と推定される艦船三十四隻である。」

然も、右の如き所謂「マカツサル大海戦」なるものを捏造して、反樞軸軍の勝利を盛んに宣傳して居たのであるが、艦隊はうっかり此のデマを信じて出港した爲に我が荒鷲の好餌となり、ジャバ沖海戦となつて、可惜巡洋艦二隻沈没、三隻大破、西南太平洋の制海空權完全喪失と云ふことになつてしまつたのである。

## 第五節 世界の信用を博した我國の宣傳

由來我國人は宣傳を一種の廣告に過ぎないものとして卑しむ風があつた。従つて「日本は宣傳が下手である」と云ふことは能く耳にする所であつた。滿洲事變に際し、國際聯盟に於て四十二對一の憂目に遇つたのも、又支那事變に際し日本の眞意が兎角世界に誤解されたのも、全く蔣介石の巧妙な宣傳に負けた結果に外ならない。

然し最近日本は決して宣傳を輕視して居ない、従つて下手ではない。其の宣傳方法は堅實正確なもので、只管眞相を傳ふる事に努力して居るから、今日日本の宣傳は世界に最も信用を博し、第三國は言ふ迄もなく、敵米、英に於てすら我が海外放送に耳を傾けて居る。

今日各國の新聞紙や通信の記事に「ラジオ東京に依れば……」とか「東京放送曰く……」とかの註釋をつけて我が海外放送（電報放送並にラジオ放送を含む）が採録さ

れて居る例が極めて多い。殊に大本營發表や政府發表のものは日本の短波放送に依り敵米國の二大通信會社たるUP社とAP社のニューヨーク本社に於て受信せられて居る。況んや其の他の國に於てをやである。されば戦局の發表が日本側に有利に展開し來れば來る程、否應なしに日本情報を掲載する必要に迫られて來るのが各國に於ける情勢である。

南米アルゼンチン、ブラジル等に於ては「此の機械は東京放送が聞かれます」と云ふ文句がラジオ・セットの廣告文となつて居ると、出先の我が大使館からの報告に見へて居る所である。

米、英のデマ放送は次から次へと我が正確なる海外放送に依つて爆碎されて蔽ふすべもないのである。我が官邊の公表は公平にして正確なるものとして世界の信用を博しつゝあると同時に、我が海外放送の宣傳效果の偉大なるを證するものである。



## 第五章 戦争と電気通信政策

列強の通信政策の基調は「戦争」に在ると言ひ得る。試みに世界列強の通信政策を  
通観するに、大體一八九〇年頃以前に於ては、確立せる通信政策なるものはなかつた  
のであるが、一八八五年佛國の安南遠征より以後に於て世界各方面に於て屢々起つた  
戦争に際し、各國は夫々遭難した經驗に基き戦争を基調とする通信政策を確立するの  
緊要なるを認め、之を實現するに至つたのである。

## 第一節 國際海底線の中立性を過信したる時代

國際海底線の出現は、一八五〇年（嘉永三年）英國のドーバーと佛國のカレーとの

間に布設されたのを嚆矢とする。其の後一八五八年（安政五年）には、第一回の英米  
間大西洋横斷海底線の布設を見たが、これは間もなく故障の爲通信不能となつた。更  
に一八六六年（慶應二年）第二回の英米間海底線が布設され、次第に歐米各國間に於  
ける國際海底線は發達するに至つた。東亞に初めて海底線が布設されたのは、これよ  
り僅に四年後の一八七〇年（明治三年）であつて、早くも英國の海底線が香港から上  
海に連絡した。次いで一八七一年（明治四年）には長崎を中心とした長崎上海線、長  
崎浦鹽斯德線が開通した。大體此の頃に世界各國の通信連絡の完成を見るに至つた。

而して其の當時に於ける各國の國際海底線に對する認識は、全く此の海底線を平和  
の要具なりと考へ、假令戦時に於ても、交戦國に非ざる第三國の通信は完全に保護さ  
れ得るものと信じて居つた。其の一證例として、一八五八年八月七日、最初の大西洋  
横斷英米海底線が開通した際、イギリスのビクトリヤ女王とアメリカのビュカナン大  
統領との間に祝電が交換されたが、ビュカナン大統領は其の祝電の中に

「電信は常に中立たるべきものにして、電信に依る通信は假令敵性を有することも神聖視せらる

べきものなり。」

と言つて居る。斯の如くして一八六〇年頃より一九〇〇年頃迄世人は戦時に於て海底線の無條件中立及び無侵害が實現し得るものと考へて居た。従つて當時各國に於て獨立自主の通信政策を有つに至らなかつたのも當然である。

### 第二節 英國の世界通信壟斷時代

此の間に於て、電氣通信の平和時に於ける重要性、殊に戦時に於ける海底線の威力を逸早く達觀し、海底線政策に力を入れ始めたのは英國であつた。即ち前に述べた如く、世界最初の國際海底線たる英佛間海底線は英國に依つて完成され、其の後大西洋横斷英米海底線も英國に依つて布設され、同時に英國はアメリカ、亞細亞等に於ける植民地を連絡する必要上、海底線の布設には非常な努力を盡した結果、世界の電信は殆どイギリスの海底線に依つて行はるゝかの如き状態となり、此の状態は長距離無線

電信の發達する迄續いた。

試みに無線電信の發達せざる以前と近年に於ける世界海底線網を國別に比較すると次の様である。

	明治三十一年(一八九八年)統計		昭和八年(一九三三年)統計	
	線條延長 哩	百分率 %	線條延長 哩	百分率 %
英國	一三、六五	六〇	一三、五九	四六
米國	三、〇四	一五	九、七三	三三
佛國	一四、〇九	八三	三、三三	八九
伊國	—	—	一五、七九	四四
日本	一、五〇	〇八	九、九三	三六
日 本	—	—	九、九一	三六
丁 抹	七、二六	四三	—	—
獨 國	三、三四	一五	六、三三	一八
露 國	—	—	九、五一	三三
其 他	四、四〇	二六	一五、九四	四五

(備考、太平洋に於ける海底線網の統計に關しては第九章第二節参照)

曾て世界海底線の六割六分を所有したる英國は今や四割六分に降り、今次の大戦の爲、其の太平洋に於ける海底線を失ふ時は、更に四萬六千哩を失ふこととなるであらう。

曾て英國が世界通信を支配するに至る迄には同政府は海底線保護政策に非常なる努力を拂つたのである。即ち海底線會社に對しては莫大な補助金を與へた。其の保護政策は(一)初め海底線布設の際に補助金を交付すること(二)布設の日から十箇年或は二十箇年の期限を付して年々補助金を與へるのであつた。而して一九〇〇年迄に英國政府がこれに支出した金額は三百萬磅の巨額に達して居り、尙後年、毎年約二十五萬磅の補助金を之が爲に支出したのであつた。斯の如くして英國は世界の海底線の五割五分を占め、而も其の多くが英本國を中心としてヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、亞細亞、濠洲等に達する世界の主要幹線路なりし爲、世界の電氣通信界を壟斷し數十

年の永きに亘つて貿易上、政治上、軍事上重要な通信權を掌握して、獨逸、フランス、アメリカ其の他の列強の通信を自國の海底線網の下に隸屬せしめた。

### 第三節 近代に於ける通信政策の基調

近代に於て、各國通信政策に一大革新を齎したる原因は、戦時に於ける電氣通信の重要性であつた。

前述の如く大體一九〇〇年頃迄、列國は通信機關を以て平和の天使なりと考へ、又戦時に於ても第三國の通信並に私設會社の海底線は相當保護され得るものと信じて居つたので、各國は自國海底線政策の必要性を認めて居なかつたが、第一章に述べたやうに、一八八五年の佛の安南遠征、一八九八年の米西戦争、一八九九年の南阿戦争、一九〇四—五年の日露戦争、一九一一年の伊土戦争、而して一九一四に勃發した世界大戦等々に於ける數次の戦争中に得たる經驗に依り、各國の通信政策は變遷を遂げ

結局近代に於ける列國の通信政策は、戦時に於ける準備といふことを以て、其の根本義とするに至つた。即ち此の根本義は各國競つて自主的通信網主義の強調となつて現はれた。要するに、各國は自己の支配の下に通信機關を有つに非ざれば、平時に於ては通商上の實力發展を期することが困難であり、戦時に於ては往々一國の運命を支配する如き危険に遭遇する實例を戦争毎に經驗して來た。茲に於て、列強間に戦争を目標とする電氣通信政策なるものが生れて來たのである。

#### 第四節 近代に於ける列強の自主的通信政策

##### (イ) 獨逸

獨逸はイギリスの世界通信獨占到對抗して自主的通信網主義を實施せんとして先頭に立つた國であつた。即ち南阿戦争に於て嘗めた苦い經驗、前歐洲大戰に於ける敗

因となつた通信孤立の悲運に鑑み、近年國際通信の獨立に最大の努力を盡したのである。

其の計畫は前歐洲大戰前に於て既に相當見るべきものがあつたが、世界大戰の爲に全く之を中絶するの已むなきに至つた。而も同國は戦敗國として多くの植民地を失ひ其の經濟状態は窮乏を極めたるに拘らず、自主的通信網の建設に非常に力を注いだ。其の結果は海底電線の如き大資本と陸揚權を必要とする電氣通信機關の建設に於て英米に對抗する事の困難なるを知り、茲に長距離無線通信の完成に最も力を盡した。歐洲諸國との無線通信に就ては政府自ら之に當り、歐洲以外はトランス・ラジオ會社をして行はしむることにした。同社はナウエンに世界的無線局を設立し、南北米、日本、滿洲、比律賓、蘭領印度、シヤム、エジプト等の各地と直通々信を行つて居たが、一九三二年（昭和七年）に至り、之を政府の手に買收し、政府直營とするに至つた。而して其の無線回路數は、五十一回線、相手は三十箇國以上にも達する大規模なものである。

## (ロ) 佛 國

一八八五年の安南遠征と一八九三年のシヤム戦争に於ける佛國の遠征隊は本國との通信に關し、英國海底線に従屬することにより大なる危険と不利益を體驗したことは、第一章第一節に述べた通りである。

フランスは此の苦き經驗と更に前に述べたる南阿戦争の際には獨逸と同じ様な苦き經驗を嘗めたる結果、一八九九年には自國海底線主義に基く海底線擴張の龐大なる計畫を議會に提出し、協賛を経て之を實行に移した。其の際議會に設置された委員會は其の計畫案に就て左の通りの説明を加へて居る。

「英國が世界に於て今日の勢力を得たるはその海軍の力よりも、海底線の力に依るものが非常に大きいのである。即ち英國はその領土を地球上到る所に有し、その民族は種々雑多を極むるも能くこれを統治し得る所以のものは大なる海軍力に歸するとは言へ之等の各領土間に布設せ

られたる所の海底線に依り本國とその植民地間の連絡を圖り、通信の完全を確保し維持し得たる事が最も有效なる要素である……云々」

以上の例に依つて觀るも、戦時に於ける電氣通信の演ずる役割が如何に重大なものであるかを諒解し得ると同時に、戦争の經驗に依つて各國が重大な關心を有つて自主的通信政策の樹立に如何に努めたか、察せられるものである。

自國海底線主義に充分目的を達することの出来なかつたフランスは、無線電信の發達に依つて、其の植民地を初め世界各國との通信を自國經營に依りて實行するの政策を樹て、特許會社たるコンパニー・ラジオ・フランスをして之を經營せしめた。同社はパリの近郊サンタシーズに大無線局を有し、歐洲諸國、南米、北米、東洋の各地と直通々信を交換し、自國通信網の確立を期して居る。

## (ハ) 英 國

英國は(一)植民地及び屬國に對する統治上の必要(二)海軍國としての軍事通信上の必要(三)通商上の必要等からして夙に海底線問題に對しては多大の注意を拂つて研究調査を行ひ、且つ各國に率先して巨額の資金を投じて世界的通信網を建設し、永い間其の利益を壟斷して居つたことは、既述の通りである。斯くイギリス政府は常に海底線の擴張に對してこれが保護助長に意を用ひた。

斯の如くして英國の海底線事業は世界に冠たるものであつたが、其の後に於ても絶えず列強に先んじて海底線通信の技術の向上或は海底線料金の遞減等に力を盡した。同國に於ては夙に海底線委員會なるものを組織し農務省、植民省、陸軍省、海軍省、印度事務局及び郵政廳等より委員を任命し、此の委員會に於ては常に英帝國各地間に於ける海底線通信の現状、世界通信に於ける英國勢力の維持並に將來の擴張、改善に關する調査審議を行つて來た。

然るに近年に於ける長距離無線電信網の發達は、從來世界に有せし英國海底線會社に對して經營上大打撃を與ふるに至つたので、英國政府はこれが調整案に就て種々研

究の結果、一九二八年(昭和三年)には無線電信と海底線とを合同せしむる事に決し

一、海底線無線特殊會社 (Cable and Wireless Holding Co. Ltd.) 資本金五、三七〇萬ポ

ンド(我約八億圓)

二、海底線無線會社 (Cable and Wireless Co. Ltd.) 資本金三、〇〇〇萬ポンド(我約五億圓)

の兩會社を設立して、同國に屬する國際海底線及び無線電信は少量の官營無線局を除くの外、總て同會社をして統轄經營せしむることとした。

## (二) 米 國

米國政府は其の國の成立上、電氣通信問題に對して當初より餘り重きを置かなかつたので、國內に於ける電信電話事業の如きは總て民設會社をしてこれに當らしめて居つた。然るに其の後米西戦争の經驗に基き自國通信網主義に大なる關心を有するに至

つた。

米國は米西戦争後、フィリッピン島嶼を其の保護領とするや、直ちに起つたのは太平洋海底線布設計畫であつた。即ち米大陸からハワイ、グワムを経由してフィリッピンに至る海底線を布設するに當つて、米國陸海軍部に於ては盛んに其の國有國營を主張したのも、全く此の理由に外ならなかつた。其の後種々の理由に依り該海底線は國有國營にはならなかつたが、政府は充分に監督權を行使するの條件を附し、之に對し、巨額の補助金を下附して商業太平洋海底線會社に布設の特許を與へた。今日アメリカの國際通信は有線と無線とを問はず飽く迄もアメリカ政府の下に置く方針を確立し、其の施設及び經營は海底線會社又は無線通信會社に特許するも、孰れの場合に於ても極めて嚴重なる制限を附加して居る。例へば之等の通信に従事する職員はアメリカの市民權を有し、而も父祖三代引續きアメリカの市民たる者に非ざれば通信業務に従事することを得ずといふやうな制限が規定されて居る。

## 第五節 國際通信網の革新

各國の通信政策に一大革新を齎したる第二の原因は長距離無線通信の發達である。即ち、列強は自國海底線政策を強唱したるも、元來海底線の布設は非常に巨額な資金を必要とし、且つ其の布設又は陸揚權といふ非常に困難なる問題が伴ふのである。そこで老獪なるイギリスは、海底線布設の當初に於て必ず陸揚權の獨占權を獲得して居たのであるから、他の列強が自國海底線主義を採つても、新に其の海底線を布設する場合には、何れの國に對しても困難であつた。例へば日支間の通信に就て之を見るも日本に於ける海底線陸揚權は大北電信會社に向つて許して居る。支那の海底線陸揚權は大東電信會社と大北電信會社が獨占權を有して居る。それが爲、日支兩國自身すら自由に海底線通信連絡をすることが出來ず、つひ最近迄斯様な束縛を受けて居つた。斯様に各國はイギリスの束縛を餘儀なくせられて居た。それ故、各國は何等かの方法

に依り自主的國際通信網を開拓するの必要を痛感した結果として、各國特に獨逸は長距離無線通信技術の研究と發達に全力を傾倒したのである。斯くの如くして過去半世紀以上に亘り英國の世界通信網の獨占到束縛せられ、苦汁を嘗め來つた列強は無線電信に依りて獨自の對外通信網を建設し、以て國際通信上英國の羈絆を脱せんとする企圖を實現するに至つた。而して、本國と植民地との間は勿論、其の他通商關係の密接なる各國間に直通の無線連絡を近年續々として開始されるに至つた。最近の調査に依れば、世界に於ける國際通信用の無線回路數は左の如く驚くべき多數に上つて居る。

一、世界に於ける國際無線回路線

亞細亞地方	二三一
ヨーロッパ地方	三九四
アメリカ地方	三六三
アフリカ地方	二一九

太平洋地方

一〇八

合計

一、三一五

二、各國別無線電信回路並に相手國數

(今日未だ正確なる統計を得ざる爲、正確なる數字と言ひ難きも參考として記載する)

國名	回路數	相手國數
米	七一	五〇
英	三七	二八
佛	五五	一八
獨	五一	一三
日	三一	二一
伊	二五	二一

斯様な状態で、現今に於ては各國間は十重、二十重に直通の無線回路が設けられて居るので、其の活動力、通信距離といふことは遙かに海底線を凌駕する状況に至つて居る。



## 第六章 戦争準備に對する列強の通信網計畫

### 第一節 歐洲大戰前に於ける大電力放送の競争

今次の歐洲大戰の勃發する兩三年前から、歐洲各國は申合せたやうに競つて主要放送局の電力を擴大した。「歐洲放送聯盟」に於て發表する所に依れば、大體左の如き電力増大の計畫が起工されて居る。

國名	放送局名	從來使用せる電力 キロワット	擴張電力 キロワット
獨	柏林中央 ランゲンブルグ	六〇	三〇〇
佛	ポストナシヨナル リモージュ	八〇 〇・五	四五〇 一三〇

英	トロイトウイツチ ブルツクマンパーク其他地方局	一五〇 七〇	二〇〇 一三〇
伊	ローマ	六〇	一三〇
白	ブラツセル(二局)	一五	一三〇
西	マドリツド	五	一三〇
ポーランド	ワルシヤワ	一三〇	三〇〇
瑞典	モツタラ フアルニ	一五〇 二	二〇〇 一〇〇
蘭	ヒルバーサム	二〇	一三〇
スロバキヤ	プラチスラバ	一三五	一三〇
ユーゴスラビア	ベオグラート	二〇	一〇〇
ギリシヤ	アテネ	一五	一〇〇
リトアニア	カンナス	七	一三〇
ルーマニア	ラヂオルーマニア		一五〇

又一九四〇年に於ける歐洲各國の有する大電力放送局(電力五十キロワット以上)の

局數は左の通りであつた。

國名	局數
ドイッ	一三
フランス	一二
イギリス	一三
ソ聯邦	七
波蘭	七
イタリ	四
瑞典	三
諸威	三
其の他	一七
計	七九

一九四〇年當時に於ける空中線電力五十キロワット以上の局を擧げて、實に七九局を數へ、其の最も大なるものはソ聯モスコーの五百キロワットを第一位とし、芬蘭ラ

イチの二百二十キロワット、ルクセンブルグの二百キロワット等であつた。

前表の如く、最近歐洲各國に於ては大電力放送の競争盛んであり、國外放送の擴充が行はれたことは、結局來るべき大戰への準備としか考へられないと云ふ事は、米國コロンビア放送會社の歐洲部長であるセーチンゲル氏が「政治的武器としてのラジオ」と云ふ題の下に五年前に於て既に次の如く言つて居る。

「……斯の如き列國に於ける熱狂的な大電力放送計畫の競争が畢竟戦争への準備の一部であることは、餘程の樂天家ならざる限り誰でも思ひ付くことに相違ない。強力な放送設備は尙往古の大勇士が率先して敵の陣營を脅かして其の士氣を沮喪せしむるのと同様の役目を演ずるものである。現にスペインの革命に行はれつゝあるものは遠からず歐洲全體に起るべきもの、豫習と觀られるべきだ。戦争勃發と同時に、軍當局が直ちにラジオを把握して敵味方共に絶えず宣傳戦をやつて居る。叛軍の放送司令官キップ・ドウ・ラノ將軍は、第一線の司令官に劣らぬ重要な地位を占め、波長や時間に關する戦前の取極めは一切破却し双方共に敵の電波を妨害し打消すことに大童となつて居る。然し妨害は畢竟兩刀の劍で、敵を害すると共に、又味方をも害

するのである。塹壕中に擴聲器を据ゑて敵軍に向つて放送することが近代戦争の常套手段となつた。新聞通信員の報に據ると、マドリツドの防衛軍がイタリー義勇兵に向つてその仲間の敗軍を放送して彼等の勇氣を挫折させたり、又ミヤジャー將軍のグワダハラハラの勝利がイタリー傭兵への擴聲放送の結果に負ふ所が尠くなかつたのである。」云々

## 第二節 周到なる獨逸の準備

戦争の準備として電氣通信網の建設に最も力を效したのは獨逸である。茲に其の一、二の例を擧げて見よう。

### (イ) 普佛戦争後に於ける電信幹線の改築

一八七〇年の普佛戦争後、獨逸は國內に於ける主要電信線を地下線に改築した。普

佛戦争の結果、佛國より得た二十億圓の償金の中二千萬圓を支出して國防上必要なる電信幹線路を地下線に改めた。當時陸上線を地下線に改築するなどといふ事は極めて贅澤であり、且つ技術上困難の事であり、事業經營から言へば無論その必要は認められなかつた。然し獨逸は伯林を中心として北はロシア國境、南はオーストリア、イタリー國境、西はフランス、ベルギー、オランダ國境に至る電信幹線を總て地下線に改めた。而も其の地下線は軍事上の目的より布設せられた爲線路の方向、其の經過地名等は總て秘密にされた。之は全く後日の戦争に對する準備の一つであつた。

### (ロ) 伯林オリンピック大會に於ける

#### 世界放送は今次大戦の準備

獨逸は今度の戦争に對する放送準備を七、八年前から既に著手して居つた。一九三五年の伯林の世界オリンピック大會の時世界の三十六箇國に向つて競技状況の中継放送を行つた。我國でも中継を行つて「前畑頑張れ〜」と云ふ有名な現場からの中

繼放送を行つたのであるが、獨逸は此の中繼放送の爲に千萬圓以上の經費を掛けて居る。又我國であの中繼放送に對し料金を拂ふとすれば、少くとも五萬圓位の中繼料金を拂ふ可きであつた。然るに獨逸は各國に對し一様に料金を一文も取らずに行つた。殊に世界十八箇國に對して短波の中繼放送をする爲に、其の當時世界最大の四十乃至五十キロの大電力短波放送機を新造した。臺數は或は十臺と云はれ、或は十臺以上とも云はれて居る。此の短波機を使用して世界十八箇國に向つて無料で短波の中繼放送を行つた。而も其の一臺の製造費及び設備費は百萬圓近い經費を掛けて居る。其の當時獨逸は何の爲に斯様のことをやつたか、其の目的がよく分らなかつた。殊に其の前年即ち一九三四年に於て獨逸は非常に財政に苦しんで居る爲、戰時賠償金の支拂不能を各國に對し宣言して居るにも拘はらず、千萬圓と云ふ巨額の經費を使つて短波放送機を新造し無料にて中繼放送を行つたと云ふことが何の爲か分らなかつた。然し今日になつてすっかり分つたのは、今次の戦争が始まると獨逸は其の短波放送機を使用し、世界各國に向つて宣傳放送を開始した。オリンピック中繼放送の時に、世界に向

つて放送した經驗に依り、どの位の波長と電力を使用すれば亞細亞方面に樂に届くとか、南米方面にはどの位の波長を使へば良いとか言ふことが試験済になつて居た。それ故、今度のヨーロッパ戦争に於ては初め英、米、佛等の包圍を受けながらも前歐洲大戰に於ける通信孤立の難を免かれたのみならず、英、佛等の宣傳に對抗して完全に先手を打つ事が出来たのである。

### 第三節 太平洋制覇を目的とする米國の通信政策

米國が初め太平洋海底線布設の計畫を爲すに當つて採つた政策は、其の目的が全く太平洋制覇に在つた事は前にも述べた通りであるが、更に亞細亞大陸と米大陸との無線通信をも飽く迄自己の支配權に置かんと意圖した事は、支那に於ける大無線局建設問題に依つて推知する事が出来る。抑々支那大無線建設の事業に就ては既に我が三井契約の嚴存するに拘らず、米國は之を無視し、フェデラル無線電信會社をして新に契

約を締結せしめ、飽く迄も横車を押し遂に上海眞如の大無線電臺の建設に成功したる如きは、明かに太平洋制覇を目的とする米國海軍の傳統的精神の現はれに外ならないのである。曾つて太平洋海底線布設計畫に當つてスクワイヤ少將の強調した所は左の如くである。

「米國はスペイン戦争及びマニラ戦争の實驗に依つて痛切に海底線の必要を會得した。今後世界に於て若し戦争の慘禍を見ずんば幸であるが、苟くも人類の思想にして常に變化を免れざる以上、永久に平和の持續を望むべからざるものとせば、國家として軍備を忽せにせざることは多言を要せざる所である。必ずや陸海軍の勢力を鞏固にして常に防備を怠つてはならぬ。蓋し強勢なる軍備は平和の障壁を以て目すべきものである。今や米國の國防問題如何を顧みるに、海軍の充實、運輸の管理及び太平洋海底線の布設を以て三大重要問題と思ふ。惟ふに強大なる海軍の實效は運輸通信の利便鞏固に俟たなければならぬ。若し此の運輸通信の二大利便に缺くる所があれば、如何に強大なる海軍と雖、其の効果を十分に發揮し能はざるものにして、殷鑑遠からず實に米西戦争に於けるスペイン艦隊全滅の適例がある。苟くも此の二大利便にして

完全ならば、其の海軍力は即ち二倍以上の實效を發揮すべきものと見らる。而して斯くの如く遠距離に達する海底線の布設は國家百年の利害に稽へて經世家の忽せにすべからざる問題である。」云々

此の説は明治三十五年頃、太平洋海底線を布設する計畫の起るに當り行はれた議論であつたが、三十年の後太平洋横斷の無線電信に對しても當嵌るのである。取りも直さず他日太平洋上に起るべき戦争に對する準備の一つであつた。

#### 第四節 我國に於ける前例

##### (イ) 日清戦争に對する準備

我國に於て戦争の準備としての電氣通信網の計畫とも見るべきものには、第一に朝鮮海底線がある。該ケーブルの布設は實に明治十六年の昔に遡り、京城事變直後の計

畫であつた。即ち該海底線布設の直接動機は實に明治十五年に勃發した京城事變であつた。

京城事變とは明治十五年七月、大院君の使喉により京城に暴動が起り、日本居留民は暴徒の爲慘虐を加へられ、我が公使館の焼打となり、時の花房義質公使は館員二十數名と共に身を以て仁川に逃れ、英國汽船に乗じて歸國したといふ事件である。之より曩、朝鮮は日本と支那との勢力競ひの種となつて、當時支那の勢力旺なりし爲兎角朝鮮の我國に對する態度は不遜なるもの多く、遂に明治七年彼の有名なる征韓論となり、政府内部に於ける意見對立し、西郷隆盛一派の下野、引續いて西南役と迄進んだ。當時既に我國有識者間に於ては、朝鮮獨立問題を繞り日支の間に事あることを夙に豫測し、之が對策に就き密かに慮る所があつた。恰かも明治十五年七月、京城事變起るや、我が政府は朝鮮との間に海底線の必要なることを痛感し、大北電信會社をしてこれが布設を行はしめたのである。

當時の日本の財政状態としては、明治二年より十五年に至る迄に投資したる電信擴張費を累計して僅かに百五十萬圓に過ぎず、朝鮮海底線布設の爲一舉に三十萬の巨費を投ずることは到底不可能なる状態に在つた。

又當時の釜山は我が漁民が七、八百人居住したるに過ぎない云はゞ一小漁村に過ぎなかつたから、内地との電信業務を開始する必要に迫られても居らず、又開いても收支相償ふ筈もない。其處で開始當時はどの位電報があつたかと言ふと、該海底線を通過する電報の全部の収入は一箇年僅かに五千圓足らずであつたから、此の海底線布設の目的は有事の日に備へる爲であつた事が判る。

此の海底線の存在によつて明治十七年の第二次京城事變、更に日清戦争、日露戦争に際して我國は偉大なる効果を收め得たことを思へば、我々は當時の政府當局の先見の明に對して多大の感謝と敬意を拂ふべきである。

### 宇品築港の話

談は餘談に亘るが、當時の政府が大陸發展の基礎を作る爲に周到なる準備を爲した事業の中

に朝鮮海底線と好一對となるものは宇品の築港問題である。廣島縣の宇品港は明治十七年から著工して六箇年の日子を費して完成した。當時この宇品築港問題に對しては、斯の如き不急の事業に莫大なる經費を投下するは濫費なりとして、廣島縣民の囂々たる反對が起り、當時の縣令千田貞曉氏の如きはこれが爲非難攻撃を一身に浴びたにも拘らず、政府はこれを押切つて工事を完成した。それが爲千田知事は其の後左遷せられて宮崎縣知事になり職を退くに至つたが、完成後僅か四年にして明治二十七年に至り一度日清戦争に際會するや、大本營は廣島に進められ、宇品港は一躍軍事輸送の基地となつてあの重要な役割を果したのである。後に千田氏はその功に依り男爵に叙せられたが、當時に在つては何人も之を認識する者なく、徒らに囂々たる非難を浴せ掛けたが、日清戦争と言ひ其の後の日露戦争、滿洲事變及び大東亞戦争に當り常に軍事輸送の重要基點となつて居る事を考ふる毎に、當路者の先見の明に對して自然に頭の下るを覺ゆるのである。

(口) 日露戦争に對する準備

——故兒玉大將の先見——

日清戦役の結果として臺灣が我が領土に加へられた際、我が政府は逸早く數百萬圓の巨費を投じて臺灣海底線の布設を計畫し、當時臨時臺灣海底線建設部長であつた陸軍次官兒玉源太郎少將は所要海底線約八百哩に對して千四百哩を英國より購入した。従つて工事完成の後、五百哩許りの餘剩を生じた。其の時、兒玉次官から遞信省に對して其の五百哩の殘餘海底線の保管轉管を命ぜられた。遞信省としては斯様に多量の海底線を受繼いだので長崎に相當大規模の海底線のタンクを設け、又當時海底線布設船沖繩丸の引繼を受けたので、遞信省としては非常に喜んだのであるが、引繼ぎの條件として陸軍省から指示されたのは

「該海底線は一切他の目的に使用することを得ず、若し已むを得ず一時流用する時は必ずそれだけの線條を遞信省に於て其の年度内に購入補充し置くべし」

といふのであつた。如何なる意圖によつて斯る多量の海底線を其の儘寢かして置いて保管せしむるのか眞意の諒解に苦しんで居つたのであるが、陸軍省からの指示であるからその條件を尊重して、其の後海底線擴張の爲に一時流用した場合は必ずそれだけ

の補填を行つた。殊に明治三十三年の豫算緊縮時代にはこれが補填をなすことは却々の苦痛であつたが、然し其の條件を守り常に五百哩餘の海底線を保有することに努めた。然るに其の後七年の歳月を経過して明治三十七年に至り日露戦争の勃發するに及び、此の海底線の貯藏ありしお蔭で、金州上陸、或は北滿上陸に際して此の海底線が如何に重大なる役割を果したるかを眼の邊り見るに及んで、始めて兒玉大將の深謀遠慮を覺ると共に其の先見の明に敬服した次第である。

## 第七章 戦後經營の先驅者——電氣通信事業

### 第一節 我が四大戦役の電氣通信事業

#### 發達に及ぼしたる影響

明治維新以來七十餘年、我が國力の異常なる進展を遂げた事は言ふ迄もないが、一國の凡ゆる文化活動の神經系統となる電氣通信事業は一面に於て戦争遂行の上に極めて重大なる効果を齎らしたのである。又其の一面に於ては戦後に於ける國力伸展の影響を受け劃期的の發達を見たのである。試みに明治以後の四大戦役即ち日清、日露、世界大戦及び支那事變を契機とし、其の前後に於ける我國電氣通信事業擴張の状況を比較するに次の通りである。



四大戦争を契機とする電信電話事業の擴張程度

(一箇年平均の投資額)

年次	電信擴張費 萬圓	電話擴張費 萬圓	合計 萬圓
日清戦争前 自明治二十八年 至明治二十八年	二〇	九	二九
日清戦争後 自明治二十九年 至明治三十八年	二一五	一四〇	三五五
日露戦争後 自明治三十九年 至大正五年	二四四	四一七	六六一
歐洲大戦後 自大正六年 至昭和十一年	四八九	三、四四三	三、九三二
支那事變後 自昭和十二年 至昭和十三年	三二二	六、〇六一	六、三七三

斯様に日清戦役以前には一箇年平均二十九萬餘圓の擴張費が、日清戦役後には一躍して三百五十萬圓となり、日露戦役後には六百六十萬圓となり、歐洲大戦後には四千萬圓となり、更に支那事變に際しては六千萬圓を超過するの巨額を投ずる様になつて居る。斯の如く一と戦争毎に電氣通信事業の驚く可き發達を示して居るが、之は同時に我が國運の進展を意味するものである。

第二節 日清戦後經營と第一次電話擴張

日清戦争の結果として我が電氣通信事業に重大なる變化を與へたものは、第一次電話擴張計畫の成立である。日清戦争當時、我國に存在する電話交換局は僅かに東京、横濱、大阪、神戸の四大都市にして市外電話線は、東京・横濱間、大阪・神戸間を連絡する線に限られて居たが、日清戦争中に起つた商工業の發展に伴ひ電話の必要が認められ、茲に戦後經營の五大事業の一として電話擴張を行ふこととなり、我が電話史上に一新紀元を劃する第一次電話擴張計畫の成立を見たのである。

明治二十三年電話創業以來同二十八年に至る電話擴張費は僅かに總額五十四萬七千圓に過ぎなかつたが、明治二十九年から三十六年に至る七箇年繼續の第一次擴張計畫に於ては一躍して一千二百八十萬圓の大事業となつた。而も此の戦後經營五大事業の

一として事業公債に依つて支辨せられることに成つたのである。因に此の戦後經營五大事業とは次のものである。

- |                |       |    |
|----------------|-------|----|
| 一、官設鐵道改良及び擴張事業 | 二、七〇〇 | 萬圓 |
| 二、製鐵事業         | 三五〇   | 〃  |
| 三、電話擴張事業       | 一、二八〇 | 〃  |
| 四、煙草專賣事業       | 一、二二〇 | 〃  |
| 五、國防事業の充實      | 七、七五〇 | 〃  |

前記五大事業は孰れも數箇年に亘る繼續事業として計畫せられたるものなるが、總額一億三千三百萬圓の中電話事業が國防、鐵道に次ぐ巨額の豫算を要したる一事は注目し價する。

### 第三節 我が大陸發展の先驅としての電氣通信事業

#### (イ) 日露戦役中に成立した朝鮮通信事業の委託經營

我が亞細亞大陸進出の先驅となつたものは、蓋し明治三十八年四月韓國通信事業の經營を我が遞信省に委託した事であらう。同國の通信機關は軍事上並に大陸發展上我國に取つて非常に重要な影響を及ぼす所あるが故に、其の管理を我國に委託することとなつた。特に軍事上より觀たる最近の重大理由としては、前に述べた仁川海戦に於ける通信の利用の生々しき實例があつた。

當時韓國政府は此の通信委託協定に調印したもの、其の實行に當つて非常に逡巡した。然し我國は遞信省より人を派し、半ば強制的に事務引繼を行ひ、經營を實行し茲に同年七月大陸經營の基礎を作つたのである。果して此の先驅に續き三十八年末には韓國保護條約の成立を見、更に四十三年には韓國併合と云ふ我國二千年來の懸案の解決を見るに至つた。即ち日韓通信事業の一元化は懸て經濟、政治、軍事等國家の一元

化の先驅となつたのである。

(ロ) 滿洲事變後に於ける滿洲電信電話會社株式の設立

滿洲事變直後に於ける滿洲電信電話株式會社の設立は、我國の協力に依り適切なる施設と有效なる經營を爲す事に依り、滿洲國文化の急速なる發達を遂げたる現實の適例の一つである。滿洲帝國建國前即ち僅か十年前の張學良時代に在りては、あの廣漠たる滿洲に於ける電氣通信事業は極めて貧弱なもので、電報局百數十、一年間の電報通數八萬數千通に過ぎなかつたが、滿洲帝國建國直後の昭和八年八月滿洲經營の先驅として、日滿合辦の滿洲電信電話株式會社が設立せられてからは、驚く可き進歩を見た。即ち最近の統計に依れば、

電信に在りては、局所九百四十九局（昭和十六年九月末現在）創立當時日滿兩國政府より繼承したる電報取扱局數三百六十三局に比較すれば實に二・六倍、又一箇年の電報取扱通數は六

千萬を突破し、創立當時の約五倍の増加を示して居る。

電話に在りては、現在交換局二百五十一局、電話事務取扱局五百十四局を數ふるに至り、電話加入者數は既に十一萬名を超へ、之を創立當時の加入者數三萬に比較すれば約四倍に達し、毎年一萬前後の増加を遂げて居る。

放送事業に在りては、現在十七局の内二重放送を實施せるもの十局、聽取者は創業當時五千餘名に過ぎなかつたものが、現在四十五萬を突破し、今尙非常な勢を以て増加しつつある。斯の如くして會社の資本金は創立當時五千萬圓なりしも、昭和十五年には一億圓に増資された。

(ハ) 支那事變後に於ける華北、華中、蒙疆及び廈門の  
各通信會社の設立

支那事變に際しては北支、中支、蒙疆及び廈門に於ける治安並に經濟工作の先驅として生れたのは華北電信電話株式會社、華中電氣通信株式會社、蒙疆電氣通信設備株式會社であつて、其の後に至り廈門電氣通信株式會社等孰れも合辦事業として設立を

見たのである。

中國の更生を目指して華北電信電話株式會社の設立を見たのは、事變後間もなき昭和十三年八月、華北電氣通信事業の復舊、整備、統一、擴張に邁進し其の成績は實に目覺しいものがある。即ち創立當時の第一次五箇年計畫は僅か一年半にして既に達成し北京を中心とする日、滿、支の有線、無線の通信連絡は開始され、天津、青島、濟南、張家口等の國內施設の復舊を終り、其の電報取扱通數の如き左の飛躍的發達を示して居る。

十三年一月

一四〇、〇〇〇通

十四年三月

三九八、三五二〃

十五年三月

六五二、二七〇〃

十六年三月

一、三七五、四五八〃

電話に於ては、天津電話の整備擴充、北京電話の自動化等其の一例にして、延々三千軒に亘る無裝荷ケーブルに依る直通電話開始は、蓋し日華通信連絡に一新紀元を劃

したるものである。

更に眼を轉じて中支に就て之を觀るに、同地方は國民政府の首都南京及び支那經濟の中心地上海を首め産業、文化の寶庫である關係上、中支に於ける治安の回復、經濟の振興は極めて緊急を要するものであり、之が爲には電氣通信の整備、運營は一日も忽に出來なかつた處であつた。茲に於て中支那の電氣通信事業の一元的經營の使命を帯び、昭和十三年七月華中電氣通信株式會社は設立せられ、其の事業は新秩序建設の大旗の下に先驅として躍進の一途を辿つて居る。即ち長江流域を中心に政治、經濟上の要地を連絡する通信網の結成に邁進、上海、南京、杭州相互間の有線電信施設も出來、日支間の無線寫眞電氣業務開始され、又電話にあつても著々加入者等も増大しつつある。

更に又、蒙疆に在つては、昭和十三年三月皇軍占領後蒙疆電氣通信設備株式會社設立され、國防の安全、治安の回復、經濟の振興を第一義とし軍用通信、公衆通信を一元的に建設運營に當つた結果、其の發展は創立當時とは隔世の感がある。

厦門電氣通信株式會社は南支福建大陸の關門を扼する同島の重要性に鑑み、且つ對華僑工作の必要上、同地方に於ける電氣通信施設の復舊及び經營を行ふ目的を以て、昭和十五年十一月厦門特別市々政府條例に基き、日支合辦事業として設立を見、同地に於ける國內及び國際通信の取扱は著々整備擴充の實を擧げて居る。

以上大陸に於ける我が經綸の先驅として朝鮮、滿洲、蒙疆及び支那に於ける電氣通信事業の果たした役割を述べて來たのであるが、日、滿、支、蒙の提携と新秩序建設を理想とする我國の熱誠ある協力に依る之等合辦事業の驚く可き好成績を擧げ得たる事に鑑み、今や新秩序建設の途上に在る大東亞共榮圈内に於ける經綸の先驅として電氣通信事業の重要性を一層認識す可きである。

## 第八章 東亞通信網建設の礎石

### 第一節 東亞通信界に我國の投じた礎石

東亞諸國に於ける通信權が白人の手に掌握せられたのは實に七十年の永きに及んで居る。即ち明治三年英國が印度洋を経て馬來、蘭印、佛印、香港、上海と其の通信權を擴張したる以來實に七十餘年であつた。然るに今次大東亞戰爭に依り漸く東亞の通信は東亞人の手に依つて建設、經營さるゝ機運に到達したのである。此の機會に於て吾人は我國が東亞通信界の爲、過去五十年來苦心慘憺投じたる礎石に就て調査し置く事は、將來に於ける事業の經營上極めて有意義の事であると信ずる。

東亞通信網の礎石として觀る可き我國の施設したる事業を見るに、左の六事業を擧

げる事が出来る。

- 第一、朝鮮海底線布設（明治十五年）第六章第四節參照
- 第二、臺灣海底線布設（明治三十年）
- 第三、韓國通信委任經營（明治三十八年）第七章第三節參照
- 第四、日米海底線連絡（明治三十九年）
- 第五、長崎上海間海底線布設（大正二年）
- 第六、支那電政に關する我國の協力

（大正四年より十二年に至る九箇年間に亘り七事業に對し約六千萬圓の投資）

## 第二節 日米海底線の連絡——我國の布設したる最初の國際海底線

### 我が國際電氣通信上特筆すべき重要工事

明治三十九年小笠原海底線布設に依りグワム線と連絡して日米直接通信を開始した事は我國の世界通信を複線路とし、始めて其の安全を確保したる點に於て我が國際通信發達史上特筆す可き重要出來事であつた。其れ迄我國と世界との電信連絡としては、一に大北會社の長崎上海間及び長崎浦鹽間の海底線に依存したのであるから、何等かの事故に依り同線が不通となるが如きことあらば、帝國は忽ち對外電信の連絡を失ひ孤立の状態に陥るのみならず一朝有事の日に於ては、曾つて日露戰爭中の仁川海戰に於ける實例の如き、又ポーツマス媾和談判の際に於ける重要電報漏洩事件の如き、或は米西戰爭中のキューバ海戰に於ける西班牙艦隊封鎖に當り重要電報の不達に歸したる實例の如き由々しき事態を醸す可きに依り、豫て之に備ふるが爲に是非第二の連絡線路を設備し置くの要があつた。

然るに我國は大北會社に對し、大正元年十二月二十七日迄繼續する獨占權を附與し支那政府は同社並に大東會社に對して一九三〇年（昭和六年）迄獨占權を特許したる結果、我國は亞細亞大陸及び其の近傍の島嶼に海底線を自ら布設し、又は他の會社を

して布設せしむるを得ざるを以て、第二の連絡線を設くるには右獨占權に牴觸せざる地點を撰ばざるを得ない。其の爲には米國と直通連絡を爲すの外に途はなかつた。然るに米國に於ては明治三十一年フィリッピン島を其の領土に編入したる以來、太平洋横斷の海底線を布設するの計畫を樹て、商業太平洋海底電信會社の手に依り、桑港より布哇、グワムを経て、マニラ並に支那に達する海底線の布設計畫を進め、明治三十年には桑港マニラ間の布設を竣工又マニラ上海間は三十九年五月より通信を開始した。

國運を賭した日露戰爭中に此の大計畫を初め商太會社に於ては向ふ三十年間に亘り約六百萬圓の補助金と特殊の優先權を與へらるゝに於ては、同社にてグワムより帝國に達する海底電線を布設するの希望を申出たのであつたが、我が政府としては右の如き條件を容るゝことを好まず、寧ろ日本よりグワム迄帝國政府の海底線を布設し、同地に於て該會社の海底線と連絡するを得策なりと認め、此の計畫に就て米國政府の承認を求むることとし、明治三十七年三月米國政府の内意を確めたる所、時恰かも日

露交戰中なりしを以て、米國政府は我が海底線の陸揚を承認することは、友好關係に在る日露兩交戰國に對し宣言したる嚴正中立と一致せざるを以て其の時機に非ざる旨の非公式の回答に接した。依つて我が政府より更に右の代案として、商太會社が其の海底線を日本に延長する事に就ては、米國政府に許可するやを質したる所、國務長官は數日中に商太會社と商議する筈なる旨を洩したが、其の後數日にして商太會社の副社長は我が公使館員に對し、米國政府に於てはグワムより日本へ同社の海底線を延長せしむるの意向あるを以て、今日正式に申入るゝとも同政府には異議なかるべしと語れる趣なるを以て、帝國政府は

第一案としては日本の會社をして日本よりグワムに達する海底線を布設せしめ、同地に於て商太會社と接続すること

第二案としては日本より小笠原島迄は帝國政府に於て、又小笠原島よりグワム迄は商太會社に於て海底線を布設して連絡すること

を提議した。之に對し商太會社としては第一案を好まず、第二案に依つて商議を進む

ることゝなつたので、明治三十八年九月を以て帝國政府と商太會社との間に協定成立し、翌年七月には遞信省及び同社間に於て追加約定を締結し、日本は東京父島間に、又商太會社は父島グワム間に其の海底線を布設し、明治三十九年八月一日より通信を開始したのである。斯くして本邦と世界との電氣通信上複線を完成し通信の安全を確保したのである。

### 第三節 長崎上海間帝國海底線の布設

#### 興亞電氣通信上の劃期的事業

日支兩國は歴史的に、民族的に、文化的に、經濟的に最も密接なる關係に在り乍ら兩國間の電氣通信事業は大北電信會社の獨占權に束縛せられ、兩國は自主的に其の必

要を充すことが出来なかつた。即ち兩國間の電信に就ては、我國の大北會社に與へたる獨占權は明治四十五年を以て満了となるも、支那政府が同社に與へたる獨占權は昭和五年十二月三十一日迄有効にして、支那政府自身も對外電信施設をなし得ざるのみならず、第三者に之を許可することを得ざる状態に在つた。依つて我國に於ては大北會社に附與したる獨占權の消滅と同時に、日支間に自ら海底線を布設せんことを計畫し、前以て支那政府の承諾を取り置き、愈々右特權の消滅に近附きたる明治四十五年七月他の電信問題の商議と共に右の計畫を示し、大北會社の同意を求め折衝を重ねたる末

一、日支間通信より生ずる日本及び大北會社の取り分を昭和五年十二月三十一日迄合併計算とする事

二、其の分配率は過去三年間の実績に依る大北會社の収入を保障すること

三、日本政府の布設する海底線は長崎上海間に限り、且つ日支官報及び和文電報のみを取扱ふ

こと



と云ふ極めて不利なる同社の同意を得たのである。該海底線布設工事は大正三年十二月竣工、翌年一月一日より通信事業を開始した。

其の後支那事變の勃發に伴ふ在支邦人の引揚に依り、佐世保青島線、大連芝罘線は一時通信杜絶の厄に遭つたのであるが、本線のみは獨り運行を續け、非常時局下に於ける日支通信連絡上極めて重大なる役割を果したのである。

#### 第四節 支那電氣通信事業に對する本邦の協力

創業以來五十年の久しきに亘り、其の實權を歐米人の手に委ねてあつた支那の通信事業に本邦が協力するに至つたのは、大正二年余が交通部顧問として北京に赴任した以後の事であるから、比較的最近のことに屬して居る。而も近年に於ける本邦の經濟力、政治力の發展に伴つて素晴らしい發展を示して來て居る。蓋し支那に於ける利權獲得の爲には常に巨額の借款に應ずることが必要條件であつたが、其れ迄本邦には巨

額の投資をする丈けの經濟上の餘力がなかつたのと、材料及び機械を供給するには本邦の製造技術、並に能力は未だ十分でなかつたのである。然るに前歐洲大戰の後に至つては本邦の經濟力は異常の進展を見、製造技術も亦急速進歩し來つた爲、支那に於て歐米列強と優に競争する丈けの餘裕を持つに至つた。大正元年民國政府の成立と同時に余は顧問として民國政府交通部に聘せられたので、茲に本邦は支那の通信事業に参加し、且つ日支協力して東亞通信權の獨立に向つて邁進することが出来るに至つた。尤も余の交通部顧問就任以來、本邦が支那電政に協力したる主なる事項を擧ぐれば

電信事業に關しては

電信借款

電信擴張材料借款

上海芝罘海底線工事

電話事業に關しては

第四節 支那電氣通信事業に對する本邦の協力

電話借款

漢口電話工事請負

無線事業に關しては

双橋大無線局建設の契約

製造事業に關しては

中華電氣製作所の設置

等である。

(イ) 電信事業に對して

支那の對外通信權は半世紀以上の長きに亘つて英、丁に獨占されて居つた。之を解消する目的を以て本邦が力を盡したのは有線電信借款と電信擴張材料借款の二つであつた。

(1) 有線電信借款

大正七年成立し、其の額は二千萬圓にして目的は大北、大東兩電信會社の有する支那の對外通信（本邦と支那との電氣通信をも含む）に關する獨占權を消滅せしむる爲であつた。由來兩會社は常に借款の形に依り支那に巨額の融通を與へ、其の交換條件として獨占權の期限を續行するのであつた。大正五年頃民國政府の財政困難なるに乘じ、新に電信借款を増加し其の條件として従來の獨占權の期限を更に向ふ三十箇年に亘つて延長せんとする計畫あるを耳にした余は之を阻止する爲、本借款を提唱し成立せしめたのである。即ち日本興業銀行、臺灣銀行、朝鮮銀行の三銀行が出資して中華滙業銀行を通じて交通部に貸したのである。其の條件は

- (一) 將來支那政府が外國から電信に關し資金を借りる時、並に現在の借款を増加する場合は豫め日本に協議すること
  - (二) 國際通信に關する英國及び丁抹の獨占權の期限を延長せざること
  - (三) 全國の有線電信の資産及び收入を擔保とすること
- 等其の主なるものであるから、此の借款の成立に依りて支那の對外通信權の獨立の基礎が出來

たのである。

## (2) 電信擴張材料の借款

更に本邦では、支那交通部に對し同國の電信を擴張する爲必要とする資金の融通を與へた。之は東亞興業株式會社に依り成立したので、總額一千五百萬圓であつた。其の條件として日本は電信擴張用材料供給に關し優先權を獲得したのであつた。

此の借款に依り日本で施行した重要な工事としては上海—芝罘間の長距離海底線の工事を挙げねばならぬ。即ち五五〇哩に亘る海底線は古河電氣工業株式會社の手に依つて製造せられ其の布設工事も亦同社の手に依つて行つたのである。由來本邦は四面海を以て圍まれ、所謂海底線の國であつたにも拘らず、之だけの長距離の海底電線の製造と其の布設とを一會社の手に依つて行つたことは前例のない大工事で、此の成功に依り中外に本邦の電線製造の實力を示し支那をして本邦電氣通信機器材料の優秀なることを認識せしむるに大いに與つて力があつた。

## (ロ) 電話事業に對して

### (1) 電話借款

總額一千萬圓にして、中日實業株式會社の手を経て出來たものである。電話借款に就ては故澁澤子爵は餘程力を盡され、大正五年に成立した。之に依つて電話材料供給の優先權を獲得すると同時に、北京、天津其の他國有電話設備と收入を擔保に取つた有意義なものであつた。

### (2) 漢口電話工事の引受け

漢口電話は、大正五年に新式の電話設備に改造擴張せられたので、其の局内装置、線路並に加入者宅内装置を纏めて入札に附し英、米、佛、獨等の間に非常の競争があつたが、結局我が三井物産株式會社の手で請負ふことになつて、交換機、電話機、ケーブル等總ての材料は内地製品を以て行つた總額約百二十萬圓の大工事であつた。此の工事は日本が支那に於ける新式の電話工事を引受けた最初のもので、此の成功に依り電話事業方面に於ける我國最近の技術の進歩を示す事が出來た有意義な工事であつた。

(ハ) 無線事業に對して

(1) 双橋大無線局建設

大正七年に三井物産株式會社が、支那の海軍部と契約を締結し、北京の郊外双橋に五〇〇キロワットの大無線局を作ることとなり、其の契約高五十三萬磅であつて、實際に支出した額は八百萬圓以上に達した東洋最大の設備であつた。其の設備に使つた機械材料も亦總て國産品であつた。本契約に依り本邦は支那の對外無線通信に關する獨占權を有して居つたにも拘らず、之を無視した米國はフェデラル無線會社をして別に契約を締結し、蔣介石と提携して上海眞如に大無線局を建設したる爲、折角落成した三井の双橋局も其の後十數年間に亘り使用することが出来なかつた事は第七章第三節に述べた通りである。

(ニ) 電線製造事業に對して

(1) 電線製造工場設立

之は交通部と我が古河電氣工業及び住友電線兩會社の合辦の事業で、主として電線製造を目的とし、中華電氣製作所と稱呼し、資本金三百萬圓で交通部と住友、古河兩社は各其の半額を出資した。

斯くて工場を上海に設置し、其の成績は極めて良好であつたが、其の後蔣介石の南京政府の下に於て排日熱の盛んなる爲爾來休止の状態にあるが、之は將來支那に於ける電氣事業の發達するに従つて重要な役目を持つものと思ふ。

以上述べた支那電政に對する我國の協力は有線電信、電話、無線、製造の事業を通じて幾多の重要問題に關係したのであるが、昭和三年南京政府の成立以來、蔣の排日、抗日に依り契約を實行するに至らなかつたが、古諺に所謂「蒔かぬ種子は生えぬ」で此の如く我國の政府並に事業家に於て、多大の犠牲を忍び支那電政に協力したる結果は、曩に滿洲事變に於て、又支那事變に於て滿洲、華北、華中、蒙疆の各電信電話會

社が他の事業の先驅として逸早く成立を見るに至つた基礎を作つたものである。

### 第五節 電信借款の意義

#### 支那に於ける英、丁の獨占權排除

支那電氣通信界に於ける英、丁の獨占權並に之に伴ふ勢力は半世紀に亘り壟として抜く可からざるものがあつた。而して之が爲支那は勿論我國に於ても數十年に亘り計る可からざる危険と經濟上の損失を蒙つた。此の獨占權を排除する爲最も有效であつた礎石は電信借款であつた。何故左様に重要な影響を齎したものであるかに就て以下説明を加ふる必要があると思ふ。

#### 半世紀に亘る支那通信界に於ける英、丁の獨占權

十九世紀の初頭より支那の將來に著目した歐米の列強は、其の後次第に進出を圖り特に鐵道、航路及び通信事業に就ては、盛んに利權を獲得し、各々自國の勢力範圍の擴張を圖つた。殊に英國は一八六六年英米海底線布設に成功したる後、僅かに數年を出でずして一八七一年には早くも支那に進出しこれと時を同じうして丁抹も亦支那に海底線を布設した。爾來同國は列國に先んじて支那の對外通信に獨占權を獲得し、更に進んで國內通信に對しては借款の條件として或は技術者を採用せしめ、或は機材の賣込を爲し、又其の設備並に收入を擔保として、重要線路（歐亞連絡の陸線路キヤクタ線及び上海天津間の海底線）の運用の委任を受くる等、凡ゆる方面に其の勢力を扶植して優位の地歩を占むるに至つた。其の後電話事業が起り、更に無線電信が勃興するに及んで支那の電氣通信界は益々列國が鎬を削る激しい競争場裡となつた。

#### 大北電信會社の獨占權

大北電信會社は一八六九年（明治二年）丁抹の皇室の出資を中心とする株式會社と

して創立せられ、最初はスカンデナヴィア諸國と英、佛、露各國間に電信系を設置するを目的としたが、當時歐洲勢力の東漸いよく激化し、太平洋が次代の世界政策の中心地たるべき状態にあつたので、早くも東亞の電氣通信の重要性に著目した。之に加ふるに當時の露國政府は同會社に多大の出資を爲し、之を東方政策に利用することとしたのである。之に依り、同社は早くも一八七一年（明治四年）にはシベリアを横斷して極東に達する露國政府の陸線を借受け、其の一端は浦鹽斯德より我が長崎を結び、長崎より更に上海に通じ、上海より更に香港に達する海底線を布設した。又他の一端はキヤクタ線として蒙古を経て北京、天津に達する陸線と、更に天津より上海に連絡する海底電線の運用權を獲得した。斯くの如くして歐洲と亞細亞を結ぶ陸上電信系は全く大北電信會社の手に歸したのである。

#### 大東電信會社の獨占權

英國は夙に國際電氣通信の軍事上、政治上並に經濟上の重要性を達觀し世界の通信權を支配する目的と自國植民地を連絡して、其の民族的紐帶を鞏固ならしむる方針を執り大東電信會社をして東亞に其の觸手を伸ぶるに至つた。一八七一年には本國より地中海、印度洋を経て香港に達する海底線を完成し、更に香港を中心として福州を経て上海に達するもの、或は比律賓、佛印の各地へ達する海底電線網の完成を圖つた。其の後一八八三年には支那政府より正式に香港、上海の陸揚權並に海外電報の取扱に關する特權を得、次で一八九九年には大北電信會社と提携して、支那に於ける對外電信の獨占權を獲得するに至つた。而して此の兩會社の獨占權の期限は、初め一九一〇年迄であつたが、其の後、兩社は五十萬磅の借款に應じて更に之を延長し、前後實に七十年の永きに亘つて、支那に於ける電氣通信機關の利益を壟斷した。

#### 大北會社の獨占權と日本の蒙りたる危險と損失

斯の如く大北、大東兩電信會社は支那に於ける對外電信の獨占權を掌握したのであるが、就中大北電信會社は明治四年以降日本と亞細亞大陸を連絡する海底線、即ち長

崎上海線、長崎浦鹽斯德線を布設し明治十六年呼子釜山線を布設する機會に於て海外通信の獨占權を其の手に收むるに至つた。従つて此の期間に於ては日本内地より外國へ發著する總ての電報は長崎に於て大北電信會社の手に渡り、送信又は受信せられることとなり、海外通信に對する生殺の權は全く同會社の掌中に收められたのであるから、之によりて日本が受くる所の危険と損失は、ポーツマス媾和談判に於ける日本電報の漏洩等に見ても諒解し得る如く、戰時のみならず平時に於ても常に不利の立場に置かれ、外交上、經濟上幾多の不利益を蒙むることは言を俟たざる所である。

### 第六節 大無線局問題を繞る日米の爭

#### (イ) 支那無線界に於ける列強の角逐

英國と丁抹の兩國は半世紀に亘つて支那の對外電信に關する獨占權を掌握し、列國の介入を許さなかつたが、大正七年に締結された我が有線電信借款に依つて一九三〇年以後に於ける獨占權の期限延長を阻止されるに至り、先づ其の一角を崩され、更に長距離無線電信の發達と共に支那無線電信事業を繞り列強間に於ける利權獲得の角逐を展開するに至つた。而も其の最も激烈を極めたのは日、獨、英、米の四箇國であつた。就中十數年の永きに亘り日米兩國間の係争となつたのは、三井對フェデラルの大無線局建設問題であつた。

#### 獨逸の得たる優先權

支那無線界に於ける列強の競争場裡に於て最も早く活動に著手し、最初に成功したのは獨逸であつた。同國のテレフンケン會社は、大正二年の春支那海軍部と次の如き内容を有する密約を結ぶに成功した。

一、今後二十五年間支那政府はテレフンケン式無線機を採用すること

- 一、支那の無線技術者の養成は獨逸人をしてこれに當らしむること
- 二、支那内地の樞要の土地七箇所（北京、上海、漢口、廣東、汕頭、張家口、熱河）にテレフンケン式無線局を建設すること

此の陸上無線局建設の目的は主として軍用通信であつたことは言ふ迄もない。此の獨逸の優先権は前歐洲大戰に際して支那が聯合軍側に參加した爲、當然其の契約は解消するに至つたが、獨逸はそれ以前より計畫中であつた支那と歐米各國との長距離無線電信の實現に力を注ぎ、其の利権を獨占すべく北京附近に五百キロワットといふ當時世界最大の無線局建設計畫を樹て丁抹人ラーセン氏をして、支那海軍部との間に契約を結ぶことに成功したのは大正五年の事であつた。元來ラーセン氏は國籍はデンマーク人であり、其の契約も個人名義であつたが、然し同氏は古くからテレフレケン會社の技師であり、同社の推薦に依り、支那政府の無線技師に聘せられた人であるの。此の契約の背後に獨逸政府のある事は明白な所であるから、當時日本及び英國兩政府より支那政府に嚴重なる抗議を提出し、遂にラーセン契約を解消せしめ、而も該契約

は其の儘我が三井物産株式會社に於て之を引受くることになつた。

#### 無線電信の世界的獨占を目的とした英國の計畫

海底線に依り世界の電信界の霸權を握つた英國は、將來に於ける長距離無線電信の發達を達觀し、大正元年頃早くも世界一周無線電信の計畫を樹て、經過各國の獨占權を得んとし、此の企業は同國のマルコニー會社をして之に當らしめた。其の計畫の一部として、大正元年に日本及び支那兩國に對して、大無線局建設の特許を願ひ出た。勿論日本政府は之を許さなかつた。其の時丁度余は支那政府の交通部顧問として赴任することになつて、大正二年春北京に著任して直ちに支那交通部に對し日本政府は該出願に對し不許可の方針に決定したから、支那に於ても同様に之に許可を與へざるやうに進言したので、一時は不許可と内定したが、其の後袁世凱政府が財政上の窮乏より、マルコニー會社と總額二千萬圓の無線借款を起し、權利を與へることの假契約が成立した。然るに歐洲大戰の勃發の爲、此の契約は三箇月の假契約期間を經過し、其



の儘本契約調印の運びに至らなかつた。歐洲戦争終了後間もなくマルコニー會社は六百萬圓の無線電話借款に成功し、支那國內に於ける多數の無線電信局及び軍用の無線電話機を供給する事と、無線電信工場を設立するの利權を獲得した。

### (ロ) 大無線建設と米國の横車

大正九年より昭和三年に至る九箇年の長きに亘り支那大無線局建設問題を繞り、日米間に起つた争があつた。之は我が三井と支那政府の海軍部との間に大無線局建設に關する契約の成立したるを無視し、米國政府はフェデラル會社をして別に支那交通部と大無線局建設の契約を締結せしめ、之を實行する爲横車を押し通した事件である。元來支那の有線電信に於ける米國の活動は立ち遅れの姿であつたが、多年問題であつた太平洋横斷の海底線をマニラより延長して上海に陸揚げするの特權を得、茲に米國は自國の海底線即ち商業太平洋海底電信會社線に依り、東亞と本國を連絡したので

ある。其の後米國政府は主として軍事上の目的から自國通信系の確立を益々強化せんとする折柄、支那海軍部と我が三井との間に別項記載の如き大無線局建設契約の成立に依つて、支那と米國との通信の實權は我が日本に歸したことに不滿を抱きつゝあつたが、歐洲大戰の爲三井の請負工事が遅延せしことゝ、該契約が支那の海軍部を相手とし交通部を相手とせざる點を奇貨乗すべしとして、大正九年一月八日(一九二二年)米國はフェデラル無線會社をして支那交通部との間に大無線局建設契約を締結せしめた。其の内容は凡そ次のやうなものである。

一、契約金額 四百六十二萬米弗

二、一千キロワットの強力無線電臺一箇所(上海附近)及び一百キロワットの中力電臺四箇所(北京、廣東、漢口、哈爾賓)の建設

而して此の契約は明に我が三井契約に違反するものであるから、日本政府は直ちに嚴重な抗議を申込んだが、米國は其の主張を曲げず、茲に日米間の大無線局建設問題を繞る係争は、意外に重大化し、數年に亘りて決定しなかつた。然るに一九二七年

(昭和三年)に至り、蔣介石が政權を獲得して政府を南京に移すや、彼は三井契約を無視しフエデラル契約を履行した。其の建設したのが即ち眞如の大無電臺である。

斯の如く我國の抗議を無視し、約十年の永きに亘つて横車を押し通した米國政府の眞の目的は、決して單純なる經濟上の理由に非ずして、後年に於ける太平洋制覇を目的としたものであることが推知出来る。

## 第九章 大東建設と電氣通信

大東亞戰爭の目的は言ふ迄もなく、東亞及び濠洲を含む大東に於ける舊秩序を打破し、新なる秩序の下に大東共榮圈を建設するに在るのである。

所謂「大東亞共榮圈」とは從來の觀念に従へば日、滿、支を中心としフィリッピン、蘭印、佛印、泰、マレー、ビルマ及び西南太平洋諸島を包容するものにして、印度及び濠洲を含まざるを以て通念としたのであるが、其の後大東亞戰爭の擴大するに従つて東條首相の議會に於て闡明せる如く、印度及び濠洲を包含する事に依つて始めて大東亞建設の目的を完遂し得るものとなつた。斯くの如く濠洲其の他の亞細亞以外の地域を含む場合に於て之を「大東亞」と稱するは不適當にして、正に「大東」と呼ぶべきであると信じ余は本書に於て「大東共榮圈」「大東建設」と云ふ語を用ひることゝした。

大東亞戰爭開始以來戰鬥に於て、外交に於て、將又銃後に於て電氣通信が如何に利

用せられ、又其の威力の如何に大なるかに就ては前各章に於て述べた所であるが、更に進んで戦後に於ける經綸の複雑にして困難なること、共榮圈區域の廣大なること、民族の多種多様なること及び戦争の長期性を考ふる時、吾人は其の神經系統たる電氣通信の重大性を益々痛感するものである。

大東亞戦争を完遂する爲、又大東共榮圈を建設する爲其の電氣通信網を如何に建設し、如何に經營す可きかは、將に吾人の直面する大問題である。此の問題を考察する爲、先づ東亞に於ける政治上並に通信上の舊秩序に就て一瞥して見よう。

### 第一節 東亞諸國に於ける舊秩序

#### (イ) 支那に於ける舊秩序

昨年五月國民政府主席汪精衛氏が本邦來訪に當つて聲明した文句の中に「中國の舊秩序なるものは阿片戦争に端を發し、爾來多くの暴壓と經濟的侵略に依つて今日に至

つて居る」と述べて居る。汪主席の言葉は簡單な一語であるけれども歴史的に之を詳しく観るときは、白人が如何に東亞に對して計畫的に暴壓を加へて、以て今日の東亞に於ける舊體制を築き上げたかを語るものである。試みに一八四〇年以後に於て中國は列國から如何に壓迫を加へられたかと云ふ事實を示す大きな事件を年代順に擧げて見ると

- 1、阿片戦争
  - 2、英佛聯合軍の攻撃
  - 3、長髮賊の亂
  - 4、佛國との戦
  - 5、露國の侵略
  - 6、支那分割の危機
  - 7、北清事變
- 等であるが、之等に關し聊か説明を加へて見よう。

#### (1) 阿片戦争——英の香港占領の動機

十八世紀當初に於て英國東印度會社は、印度に産する阿片を支那に輸入する非人道的行爲を盛んに行つて居たが、支那に於ても其の當時既に阿片吸飲の國民に及ぼす害毒の大なることを知つて、度々これが禁煙令を發して抑え様としたが、英國人の手でドシ／＼輸入して居るので抑える事が出来なく、遂に一八三九年に廣東總督林則除は英國商人に命令を發して、所藏の阿

片の引渡しを命じた。之に端を發し英國は軍艦十六隻、武装汽船四隻、運送船二十七隻より成る支那遠征艦隊を編成して支那を攻撃し、各所に支那軍を破つた。其の結果一八四二年八月二十九日に南京に於て支那は屈辱的な媾和條約を締結せねばならなくなつた。之が即ち「南京條約」であつて、此の條約に依り英國の得た主なるものは

## 一、香港の割讓

## 二、償金二千百萬ドル

であつた。而も此の條約には將來に於ける阿片の禁輸に就て何等の制裁規程をも加へることが出来なかつた。此の戦争こそ爾來百年間に於ける白人の支那侵略の端緒となつたのである。

## (2) 英佛聯合軍の攻撃

英佛聯合軍の支那攻撃は、白人が些細な事件を口實にして支那を侵略する最も適切な實例の一つである。それは一八五六年廣東官憲で曾て英國船籍に登録せられたことのある支那船アロ一號を香港で臨検して乗組員を逮捕し、檣上の英國旗を降し、甲板に遺棄した事件があつた。其の清國官憲の處置に就ては善惡の議論があつたが、英國は此の事件を以て英國旗に對する侮

辱なりとして、遂に英佛聯合して支那を撃つた。此の聯合軍との戦は前後二回に亘つたが、結局支那の敗北となつた。此の戦に於て聯合軍の北京攻撃の際、清朝皇室は熱河に蒙塵した。又聯合軍は北京城外の離宮圓明園を占據し、先づ清朝宮廷に屬する寶物、美術品等を掠奪した後宮殿に火を放つた。爲にさしも輪奐の美を誇つた二百有餘の建物は一朝にして悉く灰燼に歸してしまひ、其の燒跡は今日も尙燒野の儘に残つて居ることは、北京に遊ぶ人の常に見る處であつて、此の英佛聯合軍に敗けた結果として、再び「北京條約」と云ふものが締結され、之に因つて清國政府は香港の對岸なる九龍を英國に割讓すること、賠償金八百萬兩を支拂ふことになつて終つた。

## (3) 長髮賊の亂——支那内亂利用の實例

白人が支那の内亂に乗じ之を利用して、其の勢力を扶植した好適例の一つである。

長髮賊の亂は一八五〇年から一八六四年の十四箇年の永きに亘る近世支那に於ける内亂の最も主なるものであつて、南京城は二回も兵燹に罹り、清朝は之が爲政治的にも財政的にも衰運を來たした。英、佛其の他の國は當初に於て長髮賊の亂を援ける傾向があつた。之が爲、叛徒

の勢力は猖獗を極めたのであるが、前述の南京條約後に至つては列國特に英國は清朝を援けることが自己に利益なることを認め、清朝を援けることに依つて長髮賊の亂は治つたが、要するに白人は清國の内亂に乘じ、自己の勢力の擴張を計るに外ならぬのであつた。

#### (4) 佛國との戰

此の戰は一八八三年から四年に掛けてフランスが安南を占領したことから、清國は之に反對して立つたのであつて、其の結果一八八五年五月に「天津條約」と云ふものが締結された。此の條約に於て清國は安南國のフランス保護國たることを承認し、且つ清國兵の安南撤退を協定したものであつて、フランスの安南侵略完成を意味することゝなつた。

#### (5) 露國の侵略

清朝が前述の如く一八五〇年から六〇年頃に掛けて英佛と事を構へ、又内亂の起るに乘じて露國は一八五〇年頃から一八五八年にかけ、屢々黒龍江一帶及び烏蘇里江以東の地を窺つて、遂に一八五八年に「愛琿條約」を締結した。此の條約は全く武力を背景とした強談判であつて

清朝は之に屈服して黒龍江以北一帶及び烏蘇里以東の地を露西亞の領分と爲すことを承認するの已むなきに至つた。更に又一八六〇年に露國は浦鹽斯德を占領することゝなつた。

#### (6) 支那分割の危機

明治三十年山東省に於て匪賊がドイツの宣教師を殺害したことから、ドイツは軍艦を以て膠州灣を占領し、其の翌年膠州灣の租借權を得た。續いてロシアは旅順、大連等關東州の租借權を、イギリスは威海衛を、フランスは廣州灣の租借權を強要して夫々成功した。其の上アメリカは支那を強迫して要所々に租借權を設定した。此の時の情勢は一步誤れば支那分割に迄進まんとする趨勢にあつたが、此の時日本は福建省の不分割を提議し、茲に支那は分割の危機を脱し得たのであつた。

#### (7) 北清事變

斯の如く明治三十一年から三十二年に亘つて、列國が暴力を背景とした強談判に依り支那より領土を奪ひ或は租借權を獲得したることに憤慨した支那の國民は、反動的に排外思想に燃え

之が動機となつて明治三十三年に北清事變が起つたのである。其の結果、聯合軍は天津、北京に勝を占め、支那は巨額の賠償金を負擔せしめらるゝことになつた。

斯の如く支那は最近百年間に於て、阿片戦争に端緒を發し、列強の侵略するところとなつて前記の七大事變を経て、其の都度或は領土を失ひ、或は莫大なる國幣を消耗した。之が即ち汪氏の所謂中國に於ける舊秩序の概要である。

### (ロ) 佛國の安南侵略

佛領印度支那は往時の安南國であつて、西曆紀元前二百年代より紀元後七百年代迄支那の領土とされて居たが、西曆千年頃から外藩に列し、爾來幾多の王朝が興亡し來つたのである。

フランスの安南侵略は一七八七年の佛安親善條約締結を機として始められたが、此の親善條約こそ實は親善條約に非ずして、全く侵略の基礎をなしたものである。

其の後安南王朝の盛衰のある毎にフランスは其の間隙を狙つて居た。一八五九年遂に安南王はフランスと干戈を交へるに至つたが、安南側の敗北に終つて一八六二年所謂「サイゴン條約」の締結となつた。此の條約に依つてフランスは交趾支那を安南王から割讓させ、翌年更にカンボチャを其の保護領に置くことゝなつた。更に一八八四年に至り、安南は再びフランスと戦端を開き敗北した爲に東京地方トシキョウに對するフランスの保護權を認めると共に、安南國王自身も保護の身となつた。

### (ハ) 泰國の受けたる侵略

泰國(舊暹羅國)は一八八七年頃より屢々フランスからメコン河以東の土地割讓を強要せられた。フランスの口實とする所は、此の地方は曾て安南及びカンボチャの所領であつたのであるが、兩國は既に佛國の勢力下に置かれた以上、該地方も亦佛領たらざるべからずと言ふ得手勝手の理窟であつた。泰國は斯る理不盡の強要に對し讓ら

なかつた爲に、一八九二年遂に武力に訴へることゝなつたが此の時も泰國は敗北した。其の結果メコン河以東の地を佛領とすることを認めて屈服した。此の暹羅フランス事件の結果、泰國に於けるフランス勢力の伸長はビルマ及びマレーに領土を有する英國に多大の刺戟を與へ、遂に一八九七年一月英佛の宣言となり、更に一九〇四年四月調印のロンドンに於ける英佛宣言となり、泰國に對する英佛兩國の政治上の地位を確保したのである。今泰國の受けた失地の跡を見るに左の通りである。

一七八七年—一八〇〇年マレー半島の一部を英國に侵略された

一八六七年—泰國の一部を佛國に割讓

一八八八年—同

一八九三年—同

一九〇四年—同

一九〇七年—同

一九〇九年—同じく英國に割讓

と言ふ工合に、過去百年餘の間に於て七回に亘つて領土を割讓するの已むなきに至つた。之が一昨年起つた泰國對佛印の境界紛争の因であつて、此の中一八九三年、一九〇四年、一九〇七年の三回に亘つて割讓した部分を此の春帝國の仲裁に依つて佛印から還付されたのである。

### (二) 英國のビルマ及びマレー侵略

十九世紀の初めに於て印度を併呑したイギリスは、更に其の手を伸して一八二四年にはビルマと事を構えて之を破つた。一八二六年には媾和條約を締結してビルマは百萬磅の賠償金とアラカン、アッサム、テナセリユームの三州をイギリスに割讓した。之が第一次のビルマ戦争である。

一八五一年には再び第二次ビルマ戦役が起つて、英國艦隊はラングーンを忽ち占領して、同年十二月の媾和條約に依り英國はペグ地方を併合し、ラングーン港を獲得し

た。以來事實上ビルマは英國の勢力下に在つて如何ともする事の出来ない状態になつた。

#### (木) 四世紀に亘る和蘭の搾取

蘭印は既に四世紀に亘つて和蘭の植民地となつて其の搾取を受けたが、其の間英國スペイン、ポルトガル等の間に度々争があつて、勢力の消長があつたが、結局十九世紀の初め頃から和蘭の手に歸した。現にスマトラ、ボルネオ、ジャバ、セレベス、ニューギニア其の他幾多の島嶼を合せ面積二百万平方呎、即ち本邦の約三倍する面積にして、其の人口は六十萬を擁し、天然の資源に恵まれ世界の寶庫と目されて居る土地であるが、和蘭人の搾取政策の爲に今日迄其の住民は民族として何等發達することが出来ないのである。

之を要するに、東亞に於ける主要なる民族は本邦を除くの外は孰れも數世紀に亘る

長い間、白色人種より受くる壓迫、搾取、劫略の爲其の發展を妨げられ、中には益々衰微する民族も少くないのである。之が即ち東亞に於ける舊體制であつて、此の白人の羈絆を脱し、新秩序を建設するに非ざれば、東亞の民族は永久に浮ぶことの出来ない運命にあると言はなければならぬのである。

### 第二節 東亞電氣通信界に於ける舊秩序

#### (イ) 國內通信機關の驚く可き貧弱さ

東亞の各國は本邦を除くの外は、何れも白人の劫略搾取を受けた結果として、政治的にも、經濟的にも常に困難な立場に置かれて居る。従つて政治、經濟、文化の先驅である電氣通信事業の發達に於て、毫も見ることがない。試みに之等諸國に於け



る電信、電話事業の發達を本邦内地に比較して見ると、左の表に示す如く驚く可き貧弱な程度に在るのが判る。

國 別	面積	人口	電話加入者	電信局所
日本内地	萬平方呎 三七・五	百萬 七二	一、〇三五千	一三、九七二 箇所
滿洲國	一四二・二	三七	一〇八	九二二
中華民國				
華北 (山東、河北、山西の三省)	四五・〇	七七	五三	一五九
華中 (江蘇、安徽、浙江、江西、湖北の五省)	七〇・〇	一一九	一五	七八
泰國	五一・〇	一四	七	七〇〇
佛印	七四・〇	二三	六	五八六
蘭印	一九〇・〇	六一	三六	一、〇八九
フィリッピン	二九・六	一六	三〇	五五二
ビルマ	六〇・〇	一五・〇	一五	六五六

之を要するに東亞諸國に於ける電氣通信事業の發達は本邦に比すれば、極めて貧弱なものであつて、大體本邦の五十分の一乃至百分の一の普及程度に在る。畢竟するに各國に於ける文化の發達程度が未だ低いからであるが、要するに白人の通信政策は白人を目的とする擴張を計畫し、土著の住民を目標とはしないのである。斯る舊體制の下に置かるゝ以上其の經濟の發達、教育の進歩、文化の向上は到底望めないことは明らかである。

(ロ) 歐米の支配下に在る太平洋海底電線網

東亞諸國の國內に於ける電氣通信設備の貧弱さは前表に示す通りであるが、之と反對に之等諸國と歐米を連絡する國際通信は案外發達して居る。而も今日太平洋に於ける有線無線の設備は、我國所有のものを除く外は全部が歐米の支配下に在るのである。即ち白人は東亞に於ける植民地或は屬領を支配する爲に本國との通信を完備す

ることは非常に力を注ぐも、土著の民族に對する文化機關の發達に意を用ひざるは彼等の侵略政策、搾取政策實行上の必要から來たのであることが諒解される。殊に英國政府は東洋と歐洲との間の電氣通信の爲に半世紀に亘り非常に力を盡した。現に東亞に於ける海底線網を概観するに、英國系の海底線會社が絶對的の勢力を持つて居る爲東亞に於ける世界通信はシンガポール及び香港を東洋に於ける通信網の中心として居る。

シンガポールを中心とする通信網

シンガポールに集まる國際海底線は約十一條あつて其の中五條は印度洋を経てヨーロッパ方面に通じ、六條は日本方面、支那沿岸及び南方諸國に連絡する海底線である。

香港を中心とする通信網

香港を中心とする海底線は北は上海を経て支那内地に通ずるもの及び日本に達するものであ

り、南はサイゴンを経て、シンガポールに行くもの、更に蘭印に達するもの、東はマニラを経て米國に達するもの、或は蘭印のラバウルに達して居るものであり、斯の如くして英國は東亞に於ける國際通信の實權を握つて居る譯である。

太平洋に於ける主要海底線

日	本 (官)	九、二八七哩
濠	洲 (官)	五三七
	ニュージールランド (官)	二九九
	蘭領印度 (官)	一二五
	フィリッピン (官)	四五九
英	ケーブル・アンド・ワイアレス會社	四三、〇三六
	イースタン・エツクステンション會社	三、五二七
米、商業太平洋海底電信會社		一一、七二四
大北電信會社		四、〇〇一

第二節 東亞電氣通信界に於ける舊秩序

(八) 國際無線通信の發達

東亞諸國內に於ける通信網は極めて貧弱なる状態にあるに拘らず、其の國際通信は比較的發達して居る。理由は主として彼等白人が其の本國との通信を出来る丈け充分に發達せしめんとする政策に出たものであり、而も從來は殆ど英國の海底線に依つて支配されて居つたのであるが、近年長距離無線技術の發達に依り各國間に直接通信の道が開かれた。例へば從來日本と東亞圈内の諸國との間の通信は大北電信會社の長崎上海線に依り、其れ以遠は英國の海底線に依つたのであるが、近年に至つては無線電信に依り、日本はマニラ、バタビヤ、サイゴン、バンコック、ボンベイ、ラバウル、香港等と直通々信を開通することが出来る様になり、更に又無線電話に至つては、今日迄に開始したものはマニラ、バンドン、サイゴン、バンコック等であつて、茲に無

線電信電話を利用する通信事業上の新秩序建設に一大光明を與へることになつた。現在大東亞に於ける國際無線通信の發達は左の通りである。

大東亞に於ける國際無線通信回線數

國名	局名	電信回線數	電話
日本	各地	二六	一六
中華民國	香港	一八	一
	汕頭	一九	一
	福州	二	一
	上海	二	一
佛領印度支那	マカオ	五	一
	サイゴン	一三	六
泰國	ハノイ	七	一
	バンコック	九	五
第二節 東亞電氣通信界に於ける舊秩序			一七三

ファイリツピン	マニラ	一四	
ザンボアング		一	
蘭領印度	バンドン	一	一三
	バタビヤ	一	六
セレベス	マカツサル	!	
英領馬來	クアラルンプール		四
ニューブリテン島	ラバウル	一	
ニューカレドニア島	ヌーメア	一	
英領北ボルネオ	サンダカン	二	
ピル	マラングーン	一	一
チモール島	デリー	一	

### 第三節 東亞放送界に於ける舊秩序

#### (1) 對日包圍の放送陣營

昭和十六年初頭より米、英に依つて計畫を進められたる所謂 A・B・C・D 包圍陣の強化に伴ひ、之等諸國に依る對日包圍のラジオ攻勢陣も亦著しく強化せられた。蓋し米、英側はラジオ攻勢に依り日本の對外宣傳を封じ且つ一朝事あらば日本を世界通信より孤立せしめ、恰も前歐洲大戰に於ける獨逸の徹を履ましめんとしたのであつた。昨年十二月八日の開戦以前に於ける對日包圍の態勢を作れる敵性放送の陣營は大略左の如きものであつた。そして排日、毎日、煽動、脅喝の放送を毎日繰返し行つて居つた。

#### (2) 重慶放送局

重慶局は遠距離用の短波を以て、毎日十四箇國語を用ひ、延時間五十七時間に亘つて、世界の空に對日デマ宣傳を行つて居つた。先づ午前四時からの第一放送は、全世界向けと稱して專